

錢貳拾價定

卷 壹 第

卷

73

9

三百諸侯

次 目 壹 之 卷

第 一	第 二	第 三	第 四	第 五	第 六	第 七	第 八	第 九	第 十	第 十一	第 十二
越 前	伊 達	池 田	蒲 生	眞 田	相 馬	北 條	佐 野	松 前	大 筒	奥 平	奥 平

例言

一 三百諸侯とは大敷をあげて書名と爲し、ものなり、白石の藩翰譜には三百三十七家なりと雖も、嘉永以後の武鑑に由れば本末二百五十三家あり、若し同姓末家等を除く時は全くは百二十二家なり。(明治以後は採らず)

一 系譜は諸祖と今日の華族の爵位氏名をめぐ、偶次其間に四五の名を掲ぐるは讀者の辨をはかるにあり。

一 遠祖は六孫王、藤原鎌足の如く疑がはしきものありと雖も、まばらく武鑑、華族名鑑等に從がふ。

一 發行は諸書によりて異同あり、この書はたゞ其精神のある所に着眼して小話舛に潤飾せり。

一 絶家せし中重なる諸侯を選みて挿入せり、()を以て區別す。

一 發行は諸祖のみに限りしに非ずと雖も、昇平二百年間は、事跡の觀る可きもの少きが故なり、且精確の事を知り難きが爲なり(樂翁公等の如きは例外なりと雖も)

一 この書全部十二卷なりと雖も、一卷は凡百二十頁餘の小冊子なり、百二十二家に配分つ時は一家十二頁にだに至らず諸祖が偉業の一斑をも窺ふと能はず記實の少きは看官これを恕せよ。

一 實名には同音異字なるもの多し、また其人によりては読み慣れしものと雖も、其實誤認れるものあり、(石田三成は三成なるが如し)此篇にはなる可く正確なるものを選び。一 舊藩地は諸侯によりて、屢々次所替を爲せし者あり、故にこの書は嘉永前後の武鑑に従がふ、明治以後の如きは取らず。

明治廿七年三月

著者識

三百諸侯卷一 目次

第一 越前

一頁

從三位中納言秀康 舞妓阿國の事

小山陣中の事 秀吉の家人を手討にせし事

從三位宰相忠直 永見右衛門母の事

第二 伊達

一二二頁

伊達中納言政宗 秀次謀叛の時の事

相馬にて政宗が膽力の事 兼松又四郎扇にて政宗を打つ事
人の典物とせし品を所持せざりし事

第三 池田

二一六頁

池田勝入齋信輝

織田信行を殺せし事

播摩宰相正三位輝政

番大膳を蹴りし事

池田左衛門督忠繼

士卒に綿衣を與へし事

新太郎少將光政

中江藤樹を訪ひし事

松平武藏守利隆

番大膳の事

第四 (蒲生)

三八頁

參議蒲生氏郷

金の三蓋菅笠の馬印をゆるされ

志事一八十万石の地を賜はりし時に歎きし事一氏郷の雅量ありし事一氏郷古主を忘れざりし事一大志ありし事

第五 眞田

五一頁

眞田伊豆守信之

父兄に孝悌なりし事

沼田様の事

安房守昌幸遺言の事

眞田左衛門尉幸村
節に死するの志を豫め一定せし事
夏御陣五月五日合戦の事

大野修理の邸へゆきし事

第六 相馬

七三頁

長門守義胤

金澤忠兵衛の事

大膳亮利胤

伊達政宗と和睦せざりし事

第七 北條

八〇頁

北條美濃守氏規

北條左衛門大夫氏勝

福島辨千代の事

第八 (佐野)

八七頁

佐野修理亮宗綱

彦間城にて討死の事

天徳寺了伯

平家琵琶を聴く事

第九 松前

九四頁

松前光廣

小石を噛みし事

紅梅の生花の事

第十 大村

一〇〇頁

丹後守喜前

下の關より歸りし事

丹後守純信

熊野某に小松を與へし事

第十一 (筒井)

一〇六頁

陽舜坊順慶

志貴城を破りし事

洞ヶ峠の筒井勢の事

小姓牧村兵太の事

第十二 奥平

一一四頁

奥平美作守貞能

奥平父子同九八郎信昌

徳川家康に歸降の事

長篠戦争の事

三百諸侯卷一

戸川 殘花 著

第一 越前

●東照大權現徳川家康二男

●源秀康長男

○源秀康 忠直 忠昌

○源忠直 光長

慶永 號春嶽

子爵松平康民(津山藩)

侯爵松平康莊(福井藩)

●源秀康七男

●源秀康四男

○源直良 直明

○源直政 綱隆

伯爵松平直亮(松江藩)

子爵松平直徳(明石藩)

●源秀康六男

○源直基 直矩

伯爵松平基則(川越藩)

二
徳川の代に越前家と稱せしは、徳川家康の第三子従三位中納言源秀康の裔なり。秀康の子忠直一伯と號し性強暴にして其家一時斷絶せしと雖も寛永元年其弟忠昌遺跡を嗣ぎ再興して越前國福井に於て三十二万石を領せり。

この家系分れて數藩となりぬ。忠直の子光長の末は領知十萬石美作國西北條郡津山藩十萬石の松平越後守となり。忠昌の子越前守光通の末は領知壹萬石越後國頸城郡糸魚川藩主松平日向守となる、秀康の三男直政の末は領知拾八萬六千石出雲國島根郡松江藩主松平出羽守となる。直政の裔は分れて領知三萬石出雲國能備郡廣瀬藩主松平佐渡守となり、又領知壹萬石出雲國能備郡母里藩主松平志摩守となる。秀康の四男直基の末は領知十七萬石武藏國入間郡河越藩主松平大和守となり、五男直良は拾萬石の格式を以て播州明石郡明石藩主松平左兵衛督の家となりぬ。

この本末八藩の祖秀康は、かの摩利支天と稱せられたる勇將岡崎三郎信康の弟にして、徳川二代の將軍秀忠には兄なりき。然れども其生母も万の方の系統卑きが爲か參河國産見の在にて生れたれども暫くは家康も公に子と爲さざりき。或時兄三郎信康と忠臣本多作左衛門重次が勸めにより家康初めて秀康を膝にかきよせ我が子の愛々しきを悦びしとかや。秀康の幼名は於義丸と稱し、十二才にて四位少將兼三河守羽柴秀康と名乗り、後に東國の名族結城入道晴朝の義子となり、結城殿と稱せられしが終

に越前福井の庄にて六拾七萬石を領し官は従三位中納言に陞任し齡三十四歳にて慶長十二年閏四月八日世を早くせり。

この人幼稚より數奇にして十歳の頃より太閤秀吉の義子となり敵中にて人と成り、猛將福島左衛門太夫加藤肥後守等を市松よ虎之助よと呼びて遊戯びし人なり。兄三郎信康の如き猛烈なる性もありたれど又弟秀忠の温和なる質もありて寛嚴宜しきに適ひし大將なりしとぞ。

天正十五年の春十四歳にて義父關白秀吉と、もに筑紫にわたり一方の大將となり日向國を征伐し、十七歳にて又結城の義子となり其家を嗣ぎ參議に進み關ヶ原の亂平きて後に死せしなり。

従三位中納言秀康

舞妓阿國の事

名にし負ふ日本一の舞妓阿國なれば、秀康の寵愛も一ト方ならず今日は觀櫻の席を開き中納言秀康の奥殿にては君臣笑坪に入りて餘念なし。

をりしも舞ひ出づる舞妓阿國、遠く白拍子の跡を慕ひ、近くは淨瑠璃姫の手振に倣らひ、笛鼓の音に

連れて唱たひ舞ひつ花間の鶯か花上の蝶か、身の動作し裾のさばき正に是れ風にもまる、絲柳、雨重
 げなる八重櫻、羅衣風に従がひ長袖交々横はりて宛轉の状をば極めぬ。並み居る家臣はアツト感にい
 りたい吐息をつくのみに、阿國が左にゆけば精神は左へゆき、右にゆけば魂魄は右に飛びさりぬ。鬼神
 は挫しぐどもこの織手細腰には敬す可き力もなし。其時、秀康は曲篋推しやり、阿國の傍に來り襟に
 懸けたる水晶の念珠をばづし「ヤヨ阿國、その珠数は御身には麗はしからず、この珠數に代へよ」と
 手に持ちし珊瑚の海紅の千金の價あるをば賜ひて阿國の襟に懸けさせたり。をりしも颯と翠簾吹き
 あぐる春風に、落花の雪を追ふ一ト雙ひの胡蝶、阿國の袖に戯ふれたり。阿國はやがて吹彈す笛竹の
 嬌々たる餘音どもに舞ひ收めて次の間へとすべり出でけり。

秀康はなに思ひけむ潜然と涙をながし、深く慮に沈みしさまなり。並み居る諸士は解語の花の阿國の
 舞に賜はれる酒肴さへ常に倍して味よきに、不可思議や、殿には御機嫌の變じ給ひて御氣色の損せし
 様なり。何をか歎かせ給ふと云ひつゝ、やがて一人の近侍は秀康の前に長こまり「殿には何事をか御
 歎き遊ばさるゝや。臣等は國の舞ひの面白く、恐れながら御前をも忘るゝばかりに醉痴れ候、殿にも
 少々御盃を御重遊ばされては如何」と着坐くづして云ひ出でたり。秀康は苦笑ひして手にもつ杯を
 案盤の上に置き小膝を立て「ヤア、愚鈍なる者どもが物の云ひごまや、汝等は國が美麗なる容色にの

小山陣中の事

み心を奪はれしか、三河武士には似氣なき奴輩かな。打物執つて戰場に向はむ者が、女子の舞に心を
 喪なひ、上方のへろ々々武士と一様になりしか、残念なり、汝等は國の舞の妙なるをのみ感ぜしか、
 熱く考へよ、國は日本一の舞妓ならずや、女子なれども彼は日本一の名ある者なり、我は堂々たる六
 尺の男子なれども未だ日本第一の男にあらず、汝は日本第一の名を博りし武士なるか」と叱りしが又
 泣然として歎きたりぞぞ。

前には巖に倚りて風に嘯ぶく猛虎に似たる、上杉中納言景勝と其臣直江山城守兼續あり。後には海水
 卷きあげて黒雲の間に火を噴く龍の如き石田治部少輔三成を首となして浮田、毛利、島津、小早川、
 大谷の面々あり號して五拾万の軍勢と云ふ。家康がこの間に身を所するや、屈すれば碎かれ伸ぶれば
 墜たる。嗚呼また難ひかな。野呂小山の陣營は風蕭々と帷幕に觸れ掃火微かに燃えて夜寂寥たり。本
 營には家康の傍に本多佐渡守正信のみ伺候せしが、家康は沈思にこまぬきし手をどきて太息をつき
 「佐渡守よ、家康いま西に引き返へさば景勝が尾を追ひて責め來らむは必定なり、よしや又攻め上らず
 とも關東を蹂躙して江戸へ亂入せむは疑ひなし、誰を選びて景勝をば喰ひ止めむ」と云へば正信は例

の沈着き顔、家康の顔を見つゝ、「守殿ならで(三河守秀康をさす)誰かは上杉勢を喰ひ止め候ふ可き」と答ふ、家康も實にもと思ふ顔色にて、さらば召せとて秀康の陣へ使を遣りたり。秀康も天下分け目の戦争ゆゑ篝火の下に坐し、福島左衛門太夫の心はいかに、細川越中守の意はいかに、石田小西には宿怨ありとも正しく主の豊臣秀頼に向ひて弓引く力ありや、彼等が妻子は大坂に在り、裏切り爲さば父君の御軍配にても勝利は覺束なし、况んや景勝は背後に在り、さすが智勇に富みし名將も思ひ屈すれば一語も吐かず、軍扇膝にたて、虎皮豊に坐し居たり。をりしも本營より御召の御使と侍の申次ぎに、秀康何かは猶豫す可き小具足の上に胴服せしま、佩刀を小童に持たせて本營に來りぬ。家康は秀康の來るを見るより近侍の士に敷皮もてと命じ、秀康の坐するを見て、「ヤヨ秀康、家康はこれより上方に向ひ浮田、毛利を驅破り石田奴を討たんと思ふなり、汝は此所に留まりて關東の鎮めとなりて給へ」と云へば、秀康は色を變じ、「父君には口惜き事を宣給ふかな、秀康いかに力弱しとて今度の御大事にオメ々々と登に御跡に留まり申す可きや、御先を仕り假令何十方騎の軍勢にても申さば烏合の奴原なり、馬蹄にかけて御道を驅開き申さむと存せしに、只今の仰こそ残念なれと答ふるにぞ、家康は聲を和らげ「三河守が志こそ満足なれ、然れど熟々思へや、汝も申す如く上方勢は烏合のみ、大谷刑部が軍配には抜け目なしとも金吾奴が高慢には利目もあるまじ、輝元は進むでは戦かはじ浮田

は貴公子の風采あるのみ、謀主石田は未だ小身、誰が其下知に従がはむ、軍は尾張か美濃ならむ平場の戦は三河の者等が手に入りしことなり、上方勢は先づ容易し。また福島、細川の諸大名を疑ふは味方の不利。こゝに難義は眼前の景勝なり、上杉は累代北越の大將にて、かの不識庵輝虎入道が練りに熟りたる武士のみ、又景勝も幼稚よりして兵馬の間に人と成りし者、侮どり難きはこの上杉、その上杉を喰ひ止めて家康に背後安く戦はせむは汝の力にあり、喰ひ止めなば弓矢の面目、父への孝に非ずや聞分けたりや。上方勢と戦はむよりは遙に増したる勳功なり」と勸むれば、秀康もやゝ心解け、「仰承まはりて候、秀康未だ軍には場廻を重ねし者に候はずといへど、景勝一人と戦ひ候はむは何程の事や候ふ可き。大將を仰せ付けられなば、秀康が此所に在らむ限りは一ト足も上杉勢の首を出ださせ申すまじ」と凛然として答へたり。家康は世に嬉しげに涙を流し、自ら鎧一領とり出だし、「秀康よ、この鎧は家康が若年の時より身に着けて、終に一度の不覺を取りしとなかりき、この鎧着て、此度の大將となり若し景勝の押し寄せ來らば切崩して勳功をなし給へ」と云ひ、絨毛こそ少し色褪たれ、札善き鎧を贈りたり。秀康は一禮して鎧に手を懸け近侍の士にわたしいと心地よげに其座を立ちぬ。やがて野州宇都宮に陣取て上杉勢を喰ひ止め、關ヶ原の戦をはるまで家康の脊後を安くなしけるとぞ。

秀吉の家人を手討にせし事

「於義丸殿が、御家人を斬られたり、御家人の首刎られたり、疾く馬より下ろし申せ」と叫者あり、
 「無禮を爲せしとて、豊臣の御家人をば於義丸殿の切り給ふとのある可きや」と罵る者あり、伏見城中の馬場は上と下へと混雑せり。

於義丸の秀康は、この時十六歳の君達なりしが、馬場の彼方より月毛の駒に鳳凰の高時繪せし鞍、虎の皮の障泥、紫縮緬の手綱片手に引きしめ塵を驅立て、駆け來りぬ。秀吉の家人が群集する所にて馬引き止め黄金作りの佩刀に生血の滴たるを打ち振り、「マアいかに、殿下の御家人たる者が秀康に無禮して馬を馳せしを許す可き道やはある、汝等も悪しく振る舞は、救さぬぞ、過誤ちして其時秀康を怨むるな」と、ハツタと睨みて叱咤せり。

この時、豊臣の家人等は於義丸秀康を殿下の實の子とあしらはず、恰も人質の如き感ありしなり。さればにや、無禮せし者を切りしとてかくは混雑なせしなり、秀吉は後にこの日の事を聞き、於義丸は秀吉の子なり、其於義丸に無禮を爲すものは罪もとより死に當れり、天晴れ秀康は心の剛なるのみならず、人斬る早業にもすぐれたりと感じたりとぞ。

從三位宰相忠直 (號一伯)

永見右衛門母の事

永見右衛門尉の母池鯉鮒殿は佛間の御燈明を挑げ、稱名の盛細々と念數推しもみ鉦打ち叩き、やがて夫中務の位牌に對ひ恰も生ける人に物云ふごとく、「草葉の陰よりも聞かれしならむ、三河守殿(忠直)が頃日の物狂はしよ、何者か妾の事を申し上げ永見右衛門の母は未だ若し御館に召されて御寵愛おそばされむとの御使あり、汝にも知らるゝ如く今こそは越前家の御家人なれ元と我が身は大御所家康様の從兄弟にあたる身なり、又汝は故中納言様(秀康)の冥途の御供して廿四歳の盛りに果なくも散り給ひしなり、其御子の忠直様が召さるゝとて、ドゥマア御館へ上らりやうぞ、右衛門と云へる愛らしき紀念の花もあるものを。思へばこの黒髪があればこそ他人にも袖をひかるゝなれ髪剃りてば、故中納言様また汝の御爲に尼法師ともなり後世を吊らひ候はむ」と組の帯の廣きに挿したる懷劍抜きはなち丈なる黒髪を心残さず推し切りたり。

* * * * *

忠直は永見の母の無情舉動を憤り、さなくとも己れは大御所の孫なりと高慢放逸に荒みし君なれば男女にかぎらず手討に爲すと數知れず、この君にしていかでか永見の母を許す可けんや。永見の母の薙髪をきくより思ひしらすべしと躍り上りて怒りつゝ、侍召しあつめ主人に對して無禮の所置決して許す可き者ならず、右衛門をば誅す可しとて命じたり。永見の方にも洩れたれば其手の者ども聚り來り鎗よ鉄砲よと薙めきたり。忠直はますく憤り、さらば軍兵をさしむけて一人も残らず首を刎ぬ可しと東西に馳せ違ひ南北に驅け廻り、あはや福井は合戦の場とならむとせり。

老臣本多丹波守は馬に鞭して永見の屋敷にゆき向ふ、必死を期したる永見の一門一族は本多を見るより、あはれ好き敵ごさんなれば本多殿を討取りて後に腹切られんは寄手何万殺せしよりも面白しと奮躍りして長刀掲げ出でんとす、右衛門は思慮ある者なれば逸る人々をなだめ本多に面會し其日は事故もなく收りたり。忠直は未だ満足せず其年も暮れ翌日は新玉の春とならむとする晦日の夕に混甲二三百騎不意に押し寄せ、永見が家の者どもを一人も残さず斬り殺せり。

貞操の婦人、忠臣の裔無道の刃に倒れ一時の灰燼となりてぞ失せにける。忠直の生涯にはかゝる事ども多かりしとぞ。爲に國政おさまらず家人黨を立て、争ひしにぞ將軍秀忠より入道せさせて一伯と號し謫居の身となり慶安三年五十六歳にて卒せり。

越前家の癡祖秀康の人と爲りを案ずれば父家康の性をも窺がふとを得べし、秀康が幼時伏見の馬場にて豊臣の家人を手討に爲すや彼既に太閤の威權に屈せず敢然として劍を掲げ、十六の少童滿城の士を威嚇して其胆を奪ひぬ、家康が小牧の戦勝に比して遜色なし。又舞妓阿國を見て泣く、秀康は花月に遊ぶ貴公子に非ず、彼の胸間に鬱勃たる英氣は蒲生氏郷に比す可きか、伊達政宗と較ぶ可きか。秀康若し徳川の一門に非ず家康の子に非ずんば空しく中原の鹿をして秀忠の手に與ふる者に非ず、日本第一を望むは彼が理想なり福井六拾餘万石は只湯沐の邑たるのみ。父家康關ヶ原に争ひ弟秀忠は上田に苦戦して功を成さず、然るに秀康は蟠まれる蛟龍の如く泰然として上杉を歴し景勝が鎧袖の動搖をも許容さとりき。秀康は信康に續きて尤も勇武の將たる人なりき、又覇氣の稜々たる公子なりき。家康の子に三郎信康、三河守秀康、薩摩守忠吉、上總介忠輝、常陸介頼宣の勇あり、秀忠、信吉、義直、頼房の温良なるあり、温良は節を失なはずして武將の器を具へたりと雖も、勇猛に至りては暴に流るゝ者ありき忠輝の如きは其一人なり。秀康は勇猛なれども節を失なはざりしが其子忠直にありては暴君と云ふの外なし、徳川氏の系統には常にこの勇猛と温良の二面を觀る、唯だ家康に在りてはこの二勢力を調和して勇猛の邊は尙武に用ひられ、温良の邊は治安に應じや、圓満の相を觀るに至りしなり、越前家の祖秀康は寧ろ勇將と云ふ可きなり。

第二 伊達

●阿部左大臣魚名公玄孫中納言山蔭裔

○伊達政宗——秀宗——忠宗

伯備伊達宗基(仙臺藩)

●伊達政宗長男

○伊達秀宗——宗利

侯爵伊達宗徳(宇和島藩)

●伊達忠宗三男

○田村宗良——建顯

子爵田村丕顯(一ノ關藩)

阿部左大臣魚名公の玄孫、中納言山蔭の末孫、高松院非藏人朝宗常陸國に下り、其子宗村奥州伊達郡を領し子孫伊達を以て氏の名となせり。

英名天下に隠れなき中納言政宗の八代の祖に大膳大夫政宗と云へるがありき、其人文武の譽高く、弓箭の事は更に云はず敷島の道にも達し、伊達家の系譜によれば新續古今集を勅選のをり、この政宗は「かきすつるもしほなりともこのたびはかくさてとめよ和歌の浦人」と云ふ歌を添へて二首の歌を奉れりとあり。

山家の霧

山あひの霧はさながら海に似て

浪かときけば松風の音

山家の雪

なかくいついらいをりなる道たへて

雪にとなりの近き山里

この政宗の名を慕て父輝宗は其子二郎が元服の時に汝も政宗朝臣にあやかれとて名乗しとなりとぞ。政宗は十九歳の時に父輝宗の仇、二本松右京亮義隆を討ちしより、其強勢破竹の如く盛名の家を亡し、天正十六年には會津四郡仙道七郡を併吞し威を東北に振ひて而を向く可き者もなかりき。志かるに豊臣秀吉が小田原征伐の役に思ふ所やありけん、僅に家の子郎黨百騎計を引卒し、小田原に参向し關白秀吉が天授の霸王たるを察知し、たゞ秀吉の命に従がひ多年辛苦して征服したる會津仙道十一郡の地を献じて餘念なく、己は岩手澤(仙臺)に移り本領を安堵せしのみ。朝鮮の役には淺野左京大夫幸長どもに晋劔の城を攻め落せり。後に少將に任じ、關白秀次が謀叛の聞えありし時に既に所領を全く没收せられ流罪の辱に逢はんと爲ししが、徳川家康の證言により辛く秀吉の怒を逃れたり、其頃よ

り家康に心意を傾むけたりとぞ。關ヶ原の亂には無二の徳川方にして屢次上杉景勝の領地に侵入し、石田等が亡びし後も景勝の地を侵し奪はむと爲したりき。故に勘賞は諸將の如くにあらざりしと雖も益々徳川家に従ひ其子忠宗は家康の養女と縁を結び、また其女をば家康の第六男上總介忠輝の北の方とは爲しぬ。

大坂陣には道明寺の合戦に大坂方の驍將後藤又兵衛基次を討ち、真田幸村を苦しめ首五百二十五を切りたり。晩年に及びて徳川氏の爲に謀りしと多きは外様の諸侯に見るとの稀なる人なり。參議より權中納言に進み、寛永三年八月七十二歳にて卒去せり。領知六拾二万五千六百石居城陸奥國宮城郡仙臺にて徳川氏の世に松平陸奥守と稱して大藩と仰がれたる家なり。

政宗の子忠宗家を嗣ぎ、其子綱宗の時に、世俗に仙臺騷動と唱ふるとありたれども、忠臣伊達安藝の力により其家を傷るとなかりき。政宗の長男秀宗は領知拾万石伊豫國宇和郡宇和島藩主となり、この家又分れて同國宇和郡吉田三万石の伊達若狹守の家となる（假名手本忠臣藏の桃井若狹介と云ふはこの家のとなり）。忠宗の三男坂上宗貞は奥州盤井郡一ノ關三万石の藩主田村右京大夫の祖先となりぬ。

伊達中納言政宗

秀次謀叛の時の事

伏見の城の奥御殿金襴の松のみは何時も常盤の色なれど、世は木枯の空となり降りみ降らずみ定めなき時雨のをりく窓うつ音のみ。徳川家康も積る齡には敵し難くや質素なれども絹の蒲團を炬燵にかけ未だ辰刻にも間ありと温りておはせしが、小童一人闕に手をつかへ、「只今伊達政宗殿よりの御使伊達上野罷出で拜謁を仕り度由、如何が取り計ひ仕つらむ」家康は少し身を起し、「政宗殿よりの使とな苦しうない通せと申せ」小童はハアト應へて退きぬ。間もなく來る伊達上野次の間にて脇指を脱ぎ、案内にひかれて家康の前より五六尺下りて拜伏したり。

家康は例の寛仁なる容貌にて使者の口上靜に聽終り、案ずる様もなく傍の近侍に向ひ「上野には飯前ならむ疾う膳を出す可し」と命じ、やがて膳部を運び來るを見て使者の伊達上野は席を退かむと爲し「かば、家康はいと氣輕く、其所にて食られよ、家康も御相伴を致さむ」と炬燵の上に置かれたる黄銅の鉢に入れて温められたる飯を下し、陪膳の者に「上野の飯は冷えたるならむ無禮なれども、この

飯をつけ易へよ」といひ懇ろに待遇たり。

使者の伊達上野は食し終り、再び謹みて家康に向ひ、「主人政宗も心痛仕りて居り候はむ、御返事承り度候」と云ひ出づれば、家康は袖より下り上野の傍に近く寄り、「ヤア、汝の主人政宗は、いつも大言を吐き散し人を蛆虫とも思はぬに、かゝる場合に望めば平常の氣勢もなきを億病者とは申すなり、殿下の御意に従ひて累世の所領にはなれ、伊豫一國易へして魚の餌食となるか、又は都の中に討死して犬の食となるか覺悟を極めて愁訴を爲せ」と常に似氣なき家康の荒き言に伊達上野はたへハアハット應へしが何事か其意を解して席を退ぞきたり。

* * * * *

政宗が京都聚樂の旅館は物騒がしく大門閉めて、一人も他の者を入れず、要事あれば通用門を細目に開きて應接するのみ、ひそかに窺へば家の子郎黨大庭に充滿たり。彼處には弓押し張る侍あり、此處には鉄炮に火繩をはさむ足輕あり、矢を負ふ人、長刀の鞘をはずす人、スワと云はイヤと云ひて衝き出でむどこそ備へけれ。洛中洛外の風説はさまざまなり、陸奥の伊達殿は大問様の御機嫌を損じ大坂より討手の来るゆゑ伏見から山崎へ出で逆寄せするげな、恐懼やと云ふ者あり、否々、全脚伊達政宗と云ふ大名は謀叛の好きな腕白今度も關白秀次様の御謀叛に組みせし故遠い奥州へ置いてはならぬか

ら累代の家人を盡とく召し寄せて伊豫の國へ島流しになるげな、其が厭さに都にて切り死と決心せしと云ふ評判じや、折角都になつた京も又黒魚となるであらうと今にも大亂の發らむ有様日夜恟々として人の心の仇波は靜るさまなし。大坂へも聞えしにぞ、やがて殿下より御使あり。政宗は殿下の御使と聞くよりいと取り亂したる有様にて大童となり刀も帶せず小男の田舎風たるが片眼のみ光らして、混雜る兵士を押し分け、やうやくにして御使をば内に請じ入れ、畏こまりて殿下の仰せを聞きをはりやがて首をあげて答ふる様、政宗、御疑惑を蒙り累代の地を召し上げられ愚息忠宗に伊豫國にて所領を賜ひ、政宗は遠島に移る可しとの御沙汰、政宗は關白秀次公の御謀叛には少しも預からず候へども、台命なれば餘儀なしと畏まり居り候に、家の子郎黨は詮議致して、何條先祖累代の地をはなれ知らぬ他境にさまよひて天下に恥をば隠す可き、政宗には尋常に腹切れよ、某等は討手の御使を引き受けて切り死と心を決めたりと申し候、この有様にては本國陸奥の者ども、政宗の下知は用ひずいかなる珍事をや生ず可き、今は主にて候政宗を臆病者と下げすみて我儘を振舞ひ候へば何事も政宗が方に及ばず、この儀よろしく御申開きを願ふ」と答へたり。使者は大坂へ歸りぬ、太閤も少し困じて在しが、をりしも徳川家康の大坂に來りしにぞ、家康に計りしかば家康は此所なりと踞躑、政宗の家人等を都にて誅せられむは容易のことに候へども、陸奥に在る家人どもが理非をも辨せず軍を起し候は

朝鮮の事さへも未だ定まらず大事の前の小事とやら、政宗のこと今度は御赦しを蒙りたく候」とこそ云はれたれ。終に伊達政宗は咎なくして領知を安堵せしどかや。

相馬にて政宗が膽力の事

政宗は大坂を打ち立ち搦手より上杉景勝を討たむと夜を日につぎて馳せ下されり。白川より以東は上杉の領地なれば道塞がりぬ、常陸の國を廻りて岩城相馬にかゝりて國に歸らむとすれば相馬は累代の敵國なり無事に通さむとは叶ふまじ、尋常の者ならむには一步も動く術のあらざるに滿身膽のみの政宗なればにや、僅に五十騎の兵を率ひて相馬の領分界に來り先づ使して云はしむる様、「今度徳川家康殿上杉謀叛の征伐あり某は搦手より向はむ爲に下りたり、あまりに道を急ぎ士卒盡く疲れ果て候、願くは御城下に旅館の設を爲し給ひて、馬の足を休め明日國に入らむと存す」とこそ云はしめたり、相馬長門守義胤は雀躍してうち喜び、「あはれ天運の盡きぬる政宗かな、伊達は累代の敵國なり、あまつさへ今度上杉を討つ一方の大將なりしとな、我は大坂に組する者なり、今夜々討して一人も残さず討ち取る可し」と云ひつゝ家人に命じ、民家を旅館にしつらへて政宗主従をば迎へ入れたり。相馬家にては夜討の評議取りつゝなり、燒討ちに爲さむと云ふ者あり、鐵砲つるべ放しに墜ちて塵殺

しに爲さむと云ふ者あり。たゞ暗然と罵りあへり。其時水谷三郎兵衛尉と云へる者遙の末座に在りけるが進み出で、申すやう、窮鳥懐に入る時んば獵師も之を殺さずとかや申す本文の候なり、政宗程の大名が年來の怨を捨て、君を頼み奉るをば欺ひて聞々と失はれむと勇士の本意に非ず、又弓矢の瑕瑾なり、しかのみならず彼の領知の界なる駒ヶ峯には御城下より僅に三里今日は未だ未の時を多くは過ぎず政宗もし歸國せむと思は、黄昏にならざるに達す可し、然るに四五十の兵を以て殊更御城下に留まると或は謀計なしとも云ふ可からず、所詮此度は無事に歸國せしめ後日に軍して兩家の勝負は天運に任す可きかと論じたり、列座の面々も異議なし異議なしと同せしにぞ、其夜は旅館の四邊に薪火を焚き木を柝ち鐘を鳴らし、夜を守るに嚴重なり、况んや兵糧秣草の類は十分にぞ供へける。相馬の番兵どもは餘りに政宗の沈着きはらひ敵國に在りながら人を蛆虫とも思はぬ様の悪くければ驚かしてくれむと深更に馬一二疋の鼻綱をば切つて放てり、左なきだに事やあらむと相馬の雜人原は思ひしことなれば、たゞ鼎の沸くが如くに混雜して恰も夜討の入りしが如く狼狽せり。政宗は小童に燭を持たせ、竹に雀の紋散らしたる小袖を軽く上にかげ左の手に刀提げ幕を絞りて立ち出でたり、焚き残したる火影にすかし靜に「相馬殿の御人や候」と云ふ相馬の警固の士はツト前に出で此所にひかへ居り候ふと云ふ、政宗は少しも騒ぐ躰なく、「政宗が召し連れ候、雜人原の狼藉を致し

二十
候は取り替りて下されよ」と鷹揚に云ひはなちて再び幕の内に入りたり、明日も周章しくは出で立
しず己の刻も思しき頃、叮嚀に義胤の許に使者を送りて禮を述べしめ、己は静に馬を打せて歸り行
きぬ。相馬の士は見え隠れに人して窺はしめたるに三里を隔てし駒ヶ峯のかなたには伊達の軍兵雲霞
の如くに充滿たりとかや。

兼松又四郎扇にて政宗を打つ事

天下の御旗本兼松又四郎は聲荒らげ「コリヤ、御侍、一度ならず二度までも長袴の裾を踏み廻り踏み
通るとは無禮には候はずや」と酔眼ハツタト見開きて咎むれば、伊達政宗は物静に御尤に候、小用
に立ちて思はずも無禮を致せり、障りしならば御免候へ」と云ふ、今日の饗應しの上座の客、誰あら
ふ仙臺中納言殿と云ひ松平陸奥守と稱すれば將軍家さへ遠慮あるに關東侍の逸氣か兼松の又四郎は傍
の扇子を取るより早く、政宗が肩衣をばテウ々々と三ツ四ツ打ちたり。スハヤ、大事と此の家の主人
松平隠岐守を初め旗本の面々は兼松と政宗を左右に隔て、又四郎をば勝手の方へ連れゆきて左右を圍
みて守りたり。政宗は悠然として元の坐に戻り他の大名ともろどもに能を見物してぞ在しけり。能の
終るや否や、大小名旗本の面々は政宗の前に來り、又四郎儀短慮にして慮外を致し候段、偏に御免を

蒙り度候」と挨拶すれば、政宗は莞爾と笑ひ、「少しも苦しからず候、某とても無禮を致せしは思は
ず知らず致せし也、是亦た堪忍に預るべく候」と答へつゝ少し笑ひて「又四郎杯を、政宗は未だ相手
になす者に候はず」と云ひければ、挨拶せし人々は。こは添なき御了見、それ又四郎に御盆をど云ふ
より早く小姓は銚子を持ち出でたり。當時は殺氣の立ちたる頃ゆる人々は大事の場こそ來れりど、政
宗の脇には永井日向守引添ひ、又四郎が狼藉なさは組んで押さへむと身構へたり、また又四郎の側に
は柳生對馬守が寄り添ひて又四郎に狼藉働らかせじ、又天下の御旗本に疵附けじと身構へてこそ坐し
居たり。政宗やがて盆をとり一ツ呑んで兼松にさし又四郎は戴きて飲みをばり。其盆を政宗に戻さん
と爲すをり、醫師某は進み出でも間仕つらんと云ひたれど、對馬守は否御間には及ぶまじ、又四郎殿
今一ツ押へて受けられよと云ひ、なみなみと注がせて飲む時に、政宗は扇拍子にとりて「うてや、う
てや、打て腹だに在るならばア」と夜討曾我の謡曲を唱たひ出で、四座の能役者は同音に「つは者
の交り頼み有る中の酒宴哉」と唱ひければ、座中一時に賑はしく舞つ唱ひつさいめきたり、其間に又
四郎は盆を政宗に戻し亭主隠岐守納めの盆をなし事なくをさまりたり。

されど隠岐守の邸の外は萬燈の如き諸家の紋附たる挑燈高張り晝をも欺むく光なり、道行人の評判は
仙臺殿こそ御旗本の兼松某に打たれたりと傳たふるにぞ伊達家の士は何かは猶豫なす可きぞ、裸馬に

打ち乗りて追々に馳せ来る者引も切らず、門外に群集りたれど奥殿の機織かにて謡曲の聲のみ洋々と聞ゆるに安堵してぞ歸りける。かへつて兼松又四郎は何故に脇差抜きて政宗を指さしりしぞ、斬りて腹をば切らざりしぞと當時の武士の物笑となりしとかや。政宗は、この時中納言の人爵を極め、奥羽二ヶ國の太守なり。兼松の無禮を許す其量や江海もたゞならずとや云ふ可きならん。

人の典物とせし品を所持せざりし事

政宗は京の旅館の春雨を獨樂の茶に心を澄まして在りけるが、をりしも茶道の陸阿彌は敷居の際に坐し機嫌を聞きに伺候せり。政宗は例の寛容いと鷹揚に「陸阿彌よ、其方が持参せし家隆卿の名歌百首は好き品なり。諸大名にも見せたれど誰一人として譽めぬはなし、手柄なりき」と賞すれば、陸阿彌は手をつきて「仰の如く先頃佐渡屋より差し上げましたる家隆卿の眞蹟は、稀なる物にこそ候御出入り候ふ若刃の佐渡屋と申す者は、質物を取り候故、未だ他にも名物の有之由に候」と手柄顔に云ひつれば、政宗は片眼に陸阿彌の顔を睨むが如くに凝視めつ、「何に質物と云質物と聞きては心に懸かるとあり、持主は誰なりしか佐渡屋に問ひ合せ候ふ可し」と云はれたり。陸阿彌其日は旅館を下がり、やがて佐渡屋に尋ねたれば持主は今川求馬と云ふものなり、家の賣たりけれど困窮して佐渡屋へ質入

し、年限立ちて流れし故に伊達家へ奉りしなりとは知られたり。政宗は斯くと聞くより早飛脚もて金五兩に家隆の眞蹟を添へ今川求馬の許へ戻されたり。

陸阿彌も佐渡屋と政宗がこの所置に心安らず怒に觸れしとありしかと案ぜしが、政宗の心は然からず、陸阿彌に打ち向ひ「其方の骨折れ佐渡屋の芳志は受け入れぬ、今川に品戻せしは家寶を質とし終に手放したるには無々叶はぬ義理のありじならむ氣の毒なりと思し故に返せしなり」と語られしとぞ。その家隆の眞蹟を見たる諸侯も政宗が、この義氣を他より聞きて皆其學を賞賛せしとぞ。計りき、この今川求馬は南蠻の外科に通ぜし者にして、政宗のこの恩に感じ伊達家に仕へて足輕大將にまで歴上がりしとかや。

陸遊の詩に妙處元在烟雨中。太陰殺氣横慘澹。元化變態合空濛。正如奇材遇事見。と云ふがあり奇絶妙絶は烟雨の中にとありと、先づ我が心を獲たり、天下の奇材は須らく事ある可し。

織豊二氏が齋權を掌握せし頃は、我が國史に於て幾多の英雄が拔地突兀として蒼穹を摩するの觀ありし時なり。尾濃遠三の間より現はれたる織田徳川の將士は論ずるを須ひず、眼をあげて天下を觀れば西には毛利、浮田、島津、大友あり、南には長曾我部、石山門徒の一派あり、北には上杉、武田、東には北條、佐竹ありて恰も周末に六國の群雄が割據したるが如し。此の名將勇士の燦爛たる間に蔚然

一頭角を露はし、一種特異の光彩を現したるは誰ぞ。柴田勝家に非ず、佐々成政に非ず、蒲生氏郷にも非ず、上杉武田の名將に非ず、東奥の勇將伊達政宗を以てこの選に適せし者とす。

抑、政宗は群雄英華の爛熳たるに當り、梅ならず櫻ならず柳ならず、殆んど無用の散材に似て、然も棟梁の地位を占め他をして駕御に苦しましむる者の如く、されど温然たる邊、飄然たる邊を具へ。惡む可き人に似て愛す可き所多く、怒る可き人にして愛す可き人、罰す可き事あり賞す可き事あり變幻出沒敢て測る能はざるは、この人の特色なりき。

政宗は秀吉に服従せしか、否、全くは服従せざりしなり、葛西大崎の逆徒も實は政宗が煽動せしが如し、秀次が謀反の風聞あるや政宗は與黨の疑惑を蒙りし諸侯中の第一人なりき。

政宗は又徳川家康に心服せしか、家康にも亦全くは服せざりき、關ヶ原の役には家康の令に従かはず上杉の領地を犯し、元和偃武の前後には支倉六右衛門を羅馬に遣り陰かに關南の志を抱けり。官は累進して中納言に任じ、將軍徳川家康と近姻の間に在りと雖も、眼中六十六の蜻蛉州を以て満足する能はざりき。然れども彼は天下の大勢を觀るに敏なり、社會の變遷を窺ふの眼力を具へたり、故に秀吉の命に應じて侵地を棄て、家康の子孫を助けて三代將軍家光の代には、諸侯に率先して家光を公方と仰ぎたり。實に政宗は脾肉の感無聊の歎に堪へずして數回謀叛を企てたれど、何時も快濶なる手段

を以て其罪を謝せり、或時は巨大なる金泥の十字架を押し立て、上洛し、或時は大童となり死地に入りて活路を開く、恰も獵狗に似たり、他の指爪は受けずと雖も虎を噛み狼を襲ひ羊を誑り兎を觸りみず、さらば獲物を得るに執着なるかと思へば之を弄し之を喚ぎ人の來るあれば獲物を捨て尾を振り躍り上り、鳴き狂ひて其罪を謝す、臆して鳴くにも非ず、怯にして尾を振るにも非ず、先天の性は端なくも覺えずして獲物を見れば止まり或は噛む所の犬の如し、故に秀吉も苦笑して之を許し家康も澁面作りて其所爲を問はざりしならめ、之を抑制せむとすれば恐る可き高價なる血と云ふ代物を夥しく流さざれば止まざるが爲なりしならん。

政宗の胆大なるは既に逸事を讀みて知りしならめ、彼は亦た加ふるに文雅を以てす、仙臺の一茶亭の扁額に題して醉處此處と書すヨイシヨ、コシヨの意なりと云ふ、洒落たる雅腸は庭の面かはかぬに、さりげなく澄みわたる月に似たり、彼の胸間の方寸は又「さらすとも誰かは越えん逢ふ坂の關の戸埋かむ夜半の白雪」と云ひし自詠の歌意と一般なりしなり、關南鵬翼何時暫、久待扶搖萬里風と慨嘆せしと雖も天無情快を政宗に與へずこの好漢をして東洋の孤島に老死せしめたり。

第三 池田

●楠帶刀正行裔

○池田勝入齋信輝——輝政

利隆——光政

茂政——侯爵池田章政(岡山藩)

●池田輝政次男

○池田忠繼——忠雄——光仲

侯爵池田輝博(鳥取藩)

池田勝入齋信輝

織田信行を殺せし事

甲「逃げ給ふとは、御未練に候、止まり給へ」と大音聲に叫びながら、痛手に屈せず追ひきたりぬ。
 乙「御謀叛の顯はれたるに御卑怯に候ぞ」と、亦も一人の武士の駆け來れり。丙「御命は某等に賜へや、何處までも免し奉らじ」と亦もや一人肩より血潮の流るゝを事どもせず大刀提げて追ひ來りぬ。
 織田信長の弟信行は髪もはなち面色蒼然と悲憤の色は雙眼に血を激ぎ、大脇指の二尺にあまれるを

片手に持ち、小袖にも袴にも滴る血は數ヶ所の疵を受けしと見えたり。心には覺えあり、兄信長に對する逆意、脱るゝ道はあらずとも一ト先母君の許にゆき又詮術もあらばと思ふを力にして、幾十間の長廊下をば喘ぎに喘ぎて駆けゆきたり。

衛立の小蔭に伺候せしは池田勝三郎信輝、此時二十一歳の屈強の若者なり、なにかは躊躇ふ可きや、肩衣はぬる間もなく信行の長袴の裾踏み止めて脊後よりムンズと組みたり、信行も亦た是れ兄信長の血統なれば臂力なかく侮り難し、上になり下になり曳出でて組み合ひしが信輝力やまさりけむ信行の右手を緊と押へ脇指もさとり膝にて又も左手をおさへ刃を逆に持ちながら柄も貫れど胸部を刺し貫めたり。

信行の死せしより織田家は全く信長に服し柴田佐久間の輩も加擔の罪を赦されて元老と仰がれ織田氏の覇業を爲すに至れり。

播磨宰相正三位輝政

番大膳を蹴りし事

父勝入齋信輝は永井傳八郎直勝に討たれ、兄紀伊守之助は安藤彦四郎直次に首を授けたり。森武藏殿はと聞けば既に砲丸の爲にあへなき御最期に候と云ふ、こゝにもかしたにも池田が家の揚羽の蝶の大旗小旗は血に染みて踏みに行かれたり。三好殿は卑怯にも早や落ちられたり。堀久太郎は崩るゝ味方にさへへられ、これも落ち行く形勢なり。長久手の野は炮烟漠々として岡も林も立ち籠めたり、鯨波をあげて寄せ来るは疑ひもなき三河武士、旗の紋を烟の絶え間にながむれば丸に立花、軍配團扇は井伊與平の手勢なり、丸に立ち葵、車、劍酸漿は本多、榊原、酒井の同勢と覺えたり、血に染む大身の鎧を提げて馬もろとも息つき居たる三左衛門尉輝政は、四邊をながめて長嘆し父君の御計略三河國に逆寄せし家康に泡くらはして、一戦に勝敗を決せんと思ひしに、三好の不覺に先陣を切り立てられ、堀秀政の狼狽に森殿の御討死、終に池田が一家の恥辱、あめくど生き存へて何にかせん、父君兄君の御跡を慕ひ冥途黄泉の御供せんと、鎧リウ〜と一ト振りふり馬の鼻先ひきちし群がる敵の眞最

中に突き入らんとぞなしにける。

敗軍の常として親子にわかれ主従もひきはなれたる時なれば三左衛門輝政の傍に侍は一人も居らざりしが、こゝに一人の舍人あり別當の身なれば、始終輝政の傍に引きそひたり。かくと見るより跳り上りて駆けゆく馬の轡を馳せながらムズと捉へ、馬の首を引き戻して馬に一鞭くらはしたり。輝政なにかは怒らざらむや、不覺の奴かな侍が討死するを止めだてなすかと云ふまゝに鎧をあげて舍人の首を碎けよとこそ蹴りたりけれ。舍人とは云へ尋常の別當には非ず、後に元老となり番大膳と稱して池田が家の危急をばあまたひ救ひし忠義の士なれば、輝政の顔をハツタと睨み「ヤア、若殿こそ不覺なれ」と片手に轡を取りながら亦もや鞭をくらはしたり、馬は秘藏の逸物なり飛ぶが如くに七八町をば馳せゆきぬ。輝政腹にすへかねて放せ〜と續けざまに蹴たりしかば血は流れて朱に染むれども手を放さず、終に輝政が討死の心を止めたり。後に輝政が播磨、備前、淡路を合せて領したるも全く此時の番大膳の力と云はせし。

池田左衛門督忠繼

士卒に綿衣を與へし事

物の具の隙に徹する寒サ刃もて肌を裂るゝ如し、足輕は鉄炮、士は槍持つ手の龜まりたり、夜討あらば如何にせん、燃やす箭のやゝともすれば濕りて消えむとす。をりく草摺りの音響かせて物頭の巡廻れば楯板に假寐する間暇もなし。

外濠の氷に月影のきらりと照り、千鳥のしばなくなど天地皆な寒威を添へざるものなし、見上れば天守閣は霧鬱と茂れる森の上に聳え、遠く翠板の音するは城中にて夜を守るなり。

池田の陣は所々に大鑊を焚き、四邊を守りて油断なし、されど初更も過ぎ二更三更となりぬれば次第に身にしむ小夜嵐肌に粟して甚寒し。をりしも其處に來たるは十六七の美少年箭の火影に見れば威の小具足に黄金作りの花車たる太刀を佩き、一人の武士に重げなる包を携せり。されど軍法なれば誰何せんと太刀に手を掛け何某殿に候ふやと高聲に尋れば、少年は、やゝと手を以て静め、「役目とは云ひながら仕寄場は特に寒からむと存じ、綿厚く入れしものを持たたり、今夜は此を着て凌げよ、又

これは酒なれど少し呑みて寒に堪へよ、軍法には背むくとも余が志を酌めよ」と綿入の肌着と小き手樽に酒を入れてぞ遣りける。番の士は打驚き、熟く視れば若殿忠繼朝臣なり、今まで太刀に掛けし手を地に突き賜物をば恐るゝ戴きたり。忠繼はまた「此事努々人に泄すな」と云ひ捨て、ぞ行きにける。

大坂冬陣のをはりし後、或時池田の侍どもが某所に打ち集りし事ありき。其中の一人が不圖忠繼の仁心を語り出づれば、一坐十四人皆な手を打ちて我も其通なり、我も然ありき、今日までは我一人のみの待遇と思ひしに、さてもく若殿の御仁心の厚きとよと感涙を流せしとぞ。忠繼は實に家康の外孫なり、名將の末に名將ありと云ふ可し。

新太郎少將光政

中江藤樹を訪ひし事

鴉の海面霞みわたり、告天子の高く唱ふは、近江國高島郡小川村の聖人様の徳行を天帝に奏するにやあらむ、紫綬を垂れたる古藤の蔭に枝折戸したる村塾あり、呷啜の聲のをりくもるゝは里の總角が三

字經を讀むか千字文を習ふか、あるは志ある京家の武士の來りて論語講ずるにやあらん。竹折りまげて垣となしたるに千代く〜と鶯の鳴くもげに塵境をはなれたる感ありけり。これなん大儒中江藤樹が草廬なり。里の子が座にまみれし足半ぬぎすて土足と同じ汚れ足もて出入りする玄關めきし所に塵をも拂はず悠然として少將光政は腰打掛けたり。儉徳を尊む君なれば野掛の衣装は黒木綿の紋附羽織、小倉の袴、鍛造への脇指柄は革もて巻きたり、さすがに羽織の紐の紫のみは未だ巳の時のさまにして軒端の藤の由縁と色を競ひぬ。備前訛の近習役士に手をつき、「御前、孔明三顧の例とは申しながら、あまりに中江の無禮」と云へば、光政は手を以て制し「猥りに物をば申すな聲高にては授業の邪魔とならむ、控へて居れ」と鷹揚なる有様に、ハツと列坐る諸臣は默然をれり。光政は武藏守利隆の長男にして母は將軍家の御養女とこそ聞えられ、この光政が身の尊貴をもち忘れ士に下るとの斯くまでとは誰も思はずりけり。いつか里の總角は「ヤ〜と歸り行きぬ、藤樹はやがて身を起し、「無禮に候ひき、稽古もをばり候。いざ此方〜」と案内して、草堂の座の中に主客の坐をしめ、古聖賢の教を説き已は召を辭したりと雖も、後に弟子熊澤蕃山ありて備前の國政を改め經濟の道に工なりしは全く藤樹の力と云ふ可し。光政は當時諸侯の中に賢君の聞高く孔子の道を尊とみ備前國閑谷に學校を設け士民を奨励せしにぞ幾程もなく國中みな其仁風に化せしとぞ。治世の代に士に下る君は亂世に塵下の創を

吸ふ名將に同じ。

新太郎少將は大國の守にして恭謙士に下ると斯くの如くなれば、其身また斯道に志篤し。こゝは駿刃薩埵、少將の鷹脇の侍は鷹の窓さしのぞき、「御前薩埵に御座りまする、御寝になりましては御風邪を感しまする」と云へば、光政は身を起し、「藤樹先生の教に従ひ十三經の一分をも規がはんと存じ、旅の籠にも四五冊を置き讀めば讀むほど玄妙に入り、瞑目して居つたのじや」鷹脇の侍は恥入りし容貌にて、「恐入りました備に御座りまする、御前の御學問に御心を御用ひ遊ばしまするは了介も(熊澤氏)感服致して居まする由に御座りまする。」少將は莞爾と笑み、「熊澤など、余は比較ぶ可き者ならず、晤孟さへも未だ得心せざるに十三經を皆な學ばむと致すは、力にあまる事だの、然し五左衛門、道歌を詠吟むだが矢立の筆にて書き付けい」鷹脇の侍は六尺の歩に従ひつゝ歩みながら懐紙に書き附けたり。

よきもあしきも影みるに、かみのけふの鏡が恐ろしものよ、われとむかふる影じやもの、
神の昔を尋ねりや其鏡じやものを。

遠ひ神より唯目の前に、それをしろなら此身がすぐに、神のすがたの形代よ。

「如何じや、面白ひかの、藤樹先生も心學を我が所作と思ひ定め、忠信を主とし行住坐臥の時に習ひ

其印を求め、心もちを廣く寛かにして、怠惰なければ必ず悟を開く可しと教へられたが人は怠り易きものだの」と、不士の白雪も磯打浪の白馬跳らするをも眺望せず、少將は近侍の者と學問の話して餘念なし。

この君にして臣にも蕃山先生ありと云ふ可きなり。蕃山に和歌あり

見る人の心からこそ山里の

うき世の外、月はすむらめ

松平武藏守利隆

番大膳の事

書院の襖は葵の紋を白く書き、上段の間には翠簾をかけたなり、左右には大小名大紋の袖かき合せて坐びたり、本多佐渡守正信は上段に向ひ、松平武藏守家來番大膳と申す。此時家康公には武藏守利隆が今度の舞振ひ奇怪なりと宣給ひ、利隆が何を陳ずるやと怒りて居はしければ、面を會はさず、翠簾の中にて隠居たり。輝政に首を蹴られても轡を放たず、池田の家を興した

る番大膳なれば威嚴を恐れず正信の方に對ひ辯舌番かに演説したり。

「大坂御城攻の刻、主人利隆儀二た心を抱き合戦の色を見て颯江表の敵を討ち候様説者の言に候へども當時利隆が軍勢を早く進め候はざりしは全く以て主人利隆の志に候はず。既に御旗下阿部四郎五郎殿には御承知の如く、利隆儀は一人怒氣ち候へども御目付和泉守殿の御下知に如何様ありても軍勢を進む可からずとの仰せ止むを得ず一時ひかへ居り候ふ始末に御座候」と理明かに語正しく辯解せり。家康も今は儀外に出で、なほも大膳の演説を聴き、武藏守利隆が二た心の疑惑の晴れればにや、「大膳其方の申し立つる次第聞届けぬ、以後を慎め」と云ふ、されど番大膳は頭を疊に付けしまし、席を下らず、佐渡守正信は傍より大膳に、「罷り立て忝なき上意なり、早く歸りて此旨を武藏守殿に聞せよ」と云へど、大膳は猶たえず、正信は又も「事相濟みたるに起ざるは未だ申し述べたき儀あるや」と少しく聲を高めて云へば番大膳は少し頭をあげ正信の方に向ひ、「憚り多き儀に候へども、以後を慎めとの上意は利隆儀全く誤なしとは聞召し届けられざる處あるかと奉存候、以前に過失之なく候はし以後を別に慎べしとの上意は之なかるまじと存候」と申す、家康は聞もあへず、「利隆に誤なき事分明なり更に疑ふ所なし」と又も云ひければ番大膳はこゝに到りて頓首再拜し靜に席を退どきたり。一座にありける者は顔見合せて番大膳の威嚴を恐れず主人の恥辱をすゝめしを嘆美せしとぞ。池田家に良臣あり、

宜なる哉、因伯備の三刃を領して子孫永く盛んなりしは。

池田氏の事を考ふるに、勝入齋信輝入道は攝津國住人池田紀伊守恆利の子なり。この恆利と云は足利公方萬松院殿に仕へし者なるが、後に尾張國に移り住み信輝に及びて織田上總介信長に仕へ數度の勳功を以て信長の代に大名とはなりしなり、信輝は信長の乳母の子にして乳兄弟の間なれば、本能寺の亂後には薙髮して入道となり、大徳寺の葬式には次男輝政其頃は古新と云はれたるが御次丸と共に信長の棺の前後をかきたり。されば信長も在世の頃には池田の子息は公達と同じく寵愛ありけるとぞ。信輝は小牧の戦のそりに秀吉を助け三河國長湫に於て子息紀伊守之助と同じく陣没せり。信輝は武功を以て身を立てし人なり、柴田、佐久間、瀧川の諸將と、もに武邊に於ては尾濃の間に鐵中の鏑々と仰ふがれたる人なり。信輝は秀吉の親友なりき加ふるに長湫の一撃全く秀吉の爲に討死せし事なれば、秀吉は次男輝政を愛せり、豊臣の姓を許し羽柴三左衛門尉と名乗り、參州吉田城に移り十五万二千石を領せり。後に太閤の媒にて徳川家康の二女を娶り之より池田氏と徳川家の親密なると一方ならず輝政關ヶ原に功ありて播磨國五十二万石を領し、累りに領知を加はへられ終に備前淡路をも併せ殆んど九十万石に至れり、官は參議に任じ五十歳にて卒せり。其嫡男利隆は松平武藏守と名乗り、再び將軍の養女を娶り、諸侯の中に於ても徳川の覺を目出度かり

けり。其嫡男即左少將光政重名の新太郎を以て世に名を轟かしたる君なり。光政の代に及びて備前に移り、この時より輝政の二男忠繼の舍弟忠雄の子光仲、因幡伯耆を領し池田氏二家となりぬ。備前岡山の池田は光政の血統にして三十二万五千石を領し、この末家に備前新田二万五千石を領したる池田内匠頭と。同國御野郡新田一万五千石の池田中務少輔の二家あり。又光仲の末は因幡鳥取藩主松平因幡守にして因伯三拾二万五千石を領し、支流二家あり一ツは因州新田にて三万石、一ツは一万五千石を領せり。岡山の池田氏には内藏頭と稱する人多く、鳥取の池田氏には因幡守或相摸守と稱せり共に松平の姓を名乗りぬ。按ずるに信輝は信長の乳母子、秀吉の親友にして信長の在世にニ々心を抱かず千軍萬馬の間に顯したる勳功は云ふも更なり、信長の弟信行を刺し、が如き賊心を以て織田氏に仕へし人なり。舊主織田信雄に弓引きたりと雖も、秀吉の爲にも亦友人の情誼を捨ず長湫に戦没せり。輝政、忠繼、忠雄、皆な時の將軍徳川の姻戚なり、後に大封を兄弟の間に分領し、池田氏を今日に至るまで全ふしたり。池田氏は情に厚ふして家門の繁榮をなし、ものか、家譜に従へば祖先は補正行の庶子なりとぞ、補氏今に廟食せり。池田氏は祖先の餘惠あるか。

第四 蒲生

參議兼飛騨守蒲生氏郷は左衛門大夫賢秀の子なり。鼻祖を尋ねるに鎮守府將軍秀郷の二男鎮守府將軍千晴六代の後、雅俊初て陸奥國より上洛し、其時江州蒲生郡を給ひ、蒲生太郎と名乗りたりと。其後鎌倉右大將頼朝にも仕へ足利殿にも屬し、が、子孫三家に分れたり、足利に仕へし者、細川の家には臣となりしもの、佐々木が家に屬せしものなり。この佐々木に屬せしが乃ち氏郷の家なり、父賢秀江州日野に居城し、六角承禎父子織田信長に攻められ佐々木の家断絶せむと爲し、時、賢秀は藝を守り孤城に墜りて打死を期せり。時に賢秀が妹嫁伊勢の神戸藏人目前に名家の滅びんと歎き城中に入りて教訓せしにぞ、終に信長に降れり。其子鶴千代丸(氏郷の幼名)をば信長は尋常の器に非ずと歎美して彈正忠(信長時に彈正忠なりき)の忠字を以て忠三郎と名乗らせ後に其女を配せたり。明智の亂のありし時に氏郷は五百騎を引率し與五十丁鞍置き馬百疋馬二百疋を従がへ、安土に馳せゆき信長の御臺所を初とし、姫君公達より女房達の末々に至るまで悉く引き具して日野の城に入れたりけり。秀吉

が山崎の勝利の後、氏郷の妹を迎へて妻と爲せり是れ後に三條殿と申せしなり。秀吉と信雄と不和の時に羽柴に組し、其賞として十二万石の封土となり、始めて飛騨守に叙爵せり。後に左近衛權少將從四位下にす、み羽柴の姓を許され累進して陸奥、出羽、越後、葛西、大崎の諸領地併せて百二十一万石の大封を領し、終に參議從三位の高位に進みぬ。文祿三年俄に病に罹り血を下すこと夥だしく、肥前の名護屋より本國に歸り、三年再び上洛せしが其年のをばりに四十歳にて没しぬ。石田治部少輔三成が讒言により秀吉の爲に毒殺せられたるなりと云ひ傳ふ。子息鶴千代丸生長して秀行と稱し徳川家康の女を娶りぬ。家人の間に爭論ありしかば、秀吉の云く陸奥出羽の鎮守は年若くしては叶ふまじ生長の後までは他に移る可しと野乃宇都宮の城を與へて其封をば二十万石となせり、實は氏郷の未亡人を秀吉の戀ひて忍びくに消息せり、其をば口惜く思ひ、髪を刺りて厄となりしにぞ憤怒しなりと聞く、この未亡人と云へるは織田信長の女にて美人の聞え高かりし人なりしとぞ。關ヶ原の役後、秀行再び會津に移ることを得て六十万石の所領となりぬ、三十歳にて世を逝り嫡子忠郷十歳にて家を嗣ぎ十五歳にて早世し繼嗣なくして其家断絶せり。

參議蒲生氏郷

金の三蓋菅笠の馬印をゆるされし事

五月雨の頃なれば、今夜も曇りて黑白もわかたず、蒲生氏郷は陣中を見廻りて、夜討入る可きぞ懈るなど下知したり。果して北條より押し寄せたり、氏郷は銀の鎧の尾の背の緒をしり一丈餘の鎧を提げて追ひ立てく進みたり。

氏郷の物見の者、町野市左衛門は強弓の譽高きものなり、弓取直し指し詰め引きつめ射けれども敵は彌が上に寄せ來り、はや柵の木を破りたり、爰ぞ大事と蒲生の侍、蒲生源左衛門郷成、田丸中務直政、町野右近幸和、蒲生左衛門郷可、同五郎兵衛郷治、佃又左衛門の面々は火水となりて戦ひたり。北條方の今夜の大將廣澤兵庫秀信は聞ゆる剛の者なれば兼て備へし鐵砲を釣瓶放しに打ち轟かし、蒲生の勢のひるむを見て兵庫は鎧を横たへて、片足を堀の中へ踏み入れ、今夜討の大將廣澤兵庫一番鎧と高らかに呼はつたり。氏郷はキツト目を注ぎ自ら堀の中に飛び入りて面もふらず背の鎧を傾け十

文字の自身の鎧を叩き立て、必ず大將兵庫を討ち取らむとぞ悪戦したり。かゝる手酷の戦ひなれば敵兵二人氏郷の鎧を取らむとすること七八度に及び、氏郷つひに廣澤を打ち洩らしたり、さすがの兵庫も今は叶はじとや思ひけん城をさして引き退く、かくと見るより氏郷は恐れく下知しつゝ自身先立ちて何處までも追ひ驅けたり。廣瀬今はかなはじと城門閉ぢて鐵砲を打ち出せば、さすがに氏郷も横紙は破り難く背に矢二ツ筋を折りかけ、物の具には鎧の紐の透間なく、かの一丈餘の十文字の鎧は鎧の如くになりぬ。氏郷が銀の鎧の尾の背と云ふは當時戰場にて名譽の物なりしなり。故に蒲生の家に新に仕ふる士めれば、吾家に銀の背を着たる兵、いつも眞先に進みて戦ふなり、其男に劣らず振舞ふ可しとぞいはれける。こは氏郷毎も眞先かけて手を下されしが故なりけり。斯る猛將なれども、金の三蓋菅笠の馬印を用ゆるとは秀吉の免さしりけるが當夜の賞として許したりとかや、この馬印は有名なる佐々成政が用ひしものなれば、秀吉も尋常の人の用ふるを許さしりしなり。氏郷は信長が軍法の衣鉢を傳へし者なりと當時の評判高かりしとかや、實に織田右大臣の智をも勇をも具へしなり。

氏郷八十万石の地を賜はりし時に歎きし事

蒲生の家の侍は上下さいめきわたりて賑々敷、殿には今般陸奥出羽の鎮守の爲に會津にて八十万石を賜はりたり。御妹御は太閤殿下の御寵愛ある三條殿なり、天下に大名多しども當家に上こそすものはあらざる可しと悦び合へり。

主の心は臣知らず、燕雀は大鵬の志をしらずとかや。蒲生氏郷は奥の一間の柱に倚り默然として愁ふる色あり、股肱の侍山崎某は次の間に伺候せしが、つくつくと氏郷の襟を見るに悄然としてをりく涙を拭へる如し。某は國のきはに來り「殿には、何事を御歎息遊ばさるや、申すも恐れ入り候へども日野に御在城の頃、漸く一城の主にて在せられしが、殿下の御恩により十二万石にならせ給ひし時は、臣等の喜悅たどふにももの候はざりき、今は又八十万石の御領地御本領を併すれば日本に指を屈する大諸侯、百二十万石餘の御所領に候ふなり、何をか御歎きに候ふや」と畏まりて云ひ出でたり。

氏郷は片膝立て、居ずまゐを直し「ヤヨ、山崎、其方も老ひ朽ちたりな、如何に大國なりとて奥羽は日本の僻地なり、一旦事の發む時、天下に旗を揚げ難し、たとひ小國なりとも都近くば爲すことあらむ、余は今流罪配軍の身と同じくなりしぞや、終に何事をか仕出す可き平生の望は空しく成りたるな

り、山崎、余が歎息は無理なるか」と、聲をひそめて私語きたり。さすが氏郷が意中を語る老臣なれば、斯くと聞きては己も望を失したる容貌にて、唯々として其座を退出ぬ。

香烟一縷床に薫り右府信長が賜物の牧溪の布袋壁間に何をか笑ふ。

氏郷の雅量ありし事

亘理某は氏郷の前に手をつきて「細川殿の御所望とは申しながら、御家御相傳の佐々木が鎧と申しては、世に知らぬ人もなき名物に候間、愚意には之に似たる鎧を御贈に相成り度と存じ候」と、氏郷の坐右に置きし佐々木鎧を熟視つゝ云ひ出でたり。氏郷は家人の諫を聽居しが、小机の上に讀みさしたる歌集を手に取りて「亘理、汝が諫も道理なれど、こゝに古歌がある」と云ひつゝ口吟みたり。

なき名ぞと人にはいひてやみなまし
心のはいらか答へん

「亘理、細川忠興は知らずども、余が心の問は答へん様なし、大儀ながら其方今より細川へ是を持参せよ」と名器を終に贈りしぞぞ。

* * * * *

奥州安達郡に川あり、川を隔て、向ふに鬼の籠りしと云ひ傳ふる黒塚あり。或時伊達政宗と領地の界を争ふことありしに、黒塚は伊達の所領なりと云ひ張りたり、其時氏郷は曲直を争論ずして靜に平道盛の歌に

みちのくの安達が原の黒塚に

鬼ごもれりといふはまことか

と歎みし事あり、安達郡は浦生の領する郡なれば黒塚も浦生に屬するとならんと云ひ、さすがの政宗も其争論を止めたりとぞ。

* * * * *

氏郷は衰弱はてたる少年を庭前に呼び出だしたり。少年の容顔を見れば女にしも爲ま欲しく鬘の毛の亂れかゝりし類は紅の色もなく蒼白たれど、雨に濡たれし梨花に似て觸れなば散らん風情あり、齡は二八か二九からぬ口元の嚴然と緊縮りし襟は艶なれども薔薇の針、さらば刺ん勢あり。丸腰の見すばらしく肌の白無垢も鼠にかはり、袂に糸櫻を縫はせ田丸の紋つけたる紫の袖も色褪めしを着て畏まり居たり。氏郷は障子開かせ椽端に出で、「田丸中務少輔が見小姓の清十郎とは其方よな」と云へば、清十郎は顔を上げ「仰の如く清十郎と申すは某が事に候、又怨あり、君を一ト太刀斬り申さんと致せ

しも信實に候、疾くこの首を刎ね給へ」と凜然として答へたり。

氏郷はまばし手を撰きて凝視め居りしが、愁然として清十郎に打ち向ひ「吾過つて罪なき義士を獄に入れ、耻辱をば與へたり、其君の爲に命を捨て、忠を盡すは賞するに餘りあり、早々伊達家へ歸る可し」と云ひわたし、傍の近侍に備へし品を疾く持てと云ひければ、近侍は畏みて大廣蓋を氏郷の前に置きぬ、氏郷は「清十郎ぬしよ、こゝに時服と太刀一ト腰あり早く衣裝を改む可し、後刻夕食の頃に酒温めて待ち申さん」と式代してと奥に入りぬ。この清十郎と云へるは伊達政宗の家臣なり。あまりに浦生氏郷の威權の強くして政宗を壓せしかば、政宗キツト思案して氏郷の姻家田丸中務少輔の家に兒小姓に奉公させ、氏郷來りし時に便宜を伺ひて刺殺せと命ぜしなり、謀の泄れしにぞ、田丸は清十郎を獄に入れ秀吉に訴へしが、秀吉なにか思ひけん和平を勧めしにぞ、政宗と氏郷の間には何事もなかりしなり。氏郷が敵を赦して士を禮遇する感ず可き人なりけり。

氏郷古主を忘れざりし事

有爲轉變は世の常ながら、佐々木承禎は江州一ヶ國を領せし大名にて、浦生の家は日野の小城に住みし家人なりき。今は昔となりけり、その承禎の子四郎殿と申すは知行僅に二百石にて太閤の咄しの

者となり、その佐々木の家臣たりし蒲生賢秀の子氏郷は百二十万石の大名となりき。或日伏見城にて四郎が太閤の前より退出りし時、氏郷は昔を思ひ出で四郎が刀を持ちて随ひしとぞ、人として情なくんば止む、情あらば誰か氏郷の舉動に感ぜざらんや。陸奥出羽鎮守の百万石の將軍、見小姓とひとしき二百石の舊君の爲に刀を執つて随ひ行き他の僕隸となるを厭はず、高直厚情比類少し。

氏郷大志ありし事

大名とは雖も昇平二百年餘の大名には非ず、千軍萬馬の間に往來し生血生首は云ふもさらなり、雨雲の中に焚火して玄米を陣笠の鍋に炊き舌鼓鳴らせし人々なり。梅鉢は前田肥前守利長朝臣、九曜の星は長岡越中守、其他上田主水、戸田武藏守の方々は、蒲生飛騨守の邸に打ち集り、今日は雁のみの料理せよと命じ他人を交せず親しき人のみ談笑たり。はや盃の數も重なり坐中亂れて見えければ、氏郷は例の豪放柱に寄りつゝありしが坐中に此後は誰が天下を取らんと云ひ出でし人ありしかば、氏郷は肥前守利長を指さして「此後はおの人の人、おの人の人」と云たり。利長は咲ひつゝ「飛州には何事を御申し候や」と答へぬ。坐中の大名も心得ぬ顔色なり、氏郷はやゝ身を起し、「肥州にも心得ぬ顔色なり、各々方も合點まいらぬ様なれど、其道理を申す可し、萬一天下に事あ

らば今日大納言殿（前田利家なり利長の父）を除き腕に覺えのある可き者やある、其上ならず北國三ヶ國を領され候へば京までは路次にさはる者もなし、西國は備前中納言殿（浮田秀家）毛利を押へ、家康は、この飛騨守喰ひ止めて箱根をト足も越させ申すまじ、この道理あればこそ、肥後が天下を取られ候と申しなり」と云ひ阿羅阿羅と咲らひたりとかや。

或時氏郷は又近習の者に向ひ、太閤以後に天下の主たらん人は加賀の又左衛門なり、（利家）もし又左衛門が得ずば我得べしと云ひしこともありしとぞ以て氏郷の大志ありし事を見る可し。

「かきりあればふかねと花は散るものぞ心みじかき春の山風」とは氏郷が手箱に遺せし筆すさみなり。人生五十いそがずとも死す可きを、奸臣の讒は霸王秀吉をして氏郷の大志あるを忌ましめたり。氏郷果して鳩毒の爲に四十歳を限りとして世を逝りしか、將た不治の病を得て卒せしか、今日に於ては其眞偽を辨ずるに由なし。當時さへも死因分明ならずして、終に一首の和歌より紛々の説を來たせしや。氏郷は毒に倒れしか、我は知らず、然りと雖も其大志ありしは疑ひなし、彼は一夕凄然として八十万石の大封を得しが爲に涙を袖に洒げり、八十万石は人の嫌惡する所のか、否、秀吉が豪放すら容易に八十万石の大封は與へしことなし。虎賁の將親統の士多しと雖も十万石の封土は猥りに與ふるものならず、氏郷や勇なりと雖も、羽柴氏の爲に身命を抛うちて苦戦したる福島加藤と比す可きに

非ず、三條殿を妻とは爲したりと雖も秀吉の親戚には非ず、累世の名門豪族にて伊達北條と肩を並ぶる家に非ず、徳川氏の如く大封を與へざれば我を噛む可き恐れありし大名にも非ず。端なくも八十万石の新領地と舊領地四十万石と併すれば實に百二十万石の大諸侯となりしに、氏郷何を悲んで涙を袖に濡ほせしや、豊公の恩や大なり。氏郷の羽柴に盡すや少なしとせざれども又大なりと云ふ可からず。

抑、氏郷の爲人を考ふるに、彼は没情漢に非ず、汲々として名利をのみ之れ崇拜する人に非ず、織田氏の本能寺の兇變を聞くや輿馬を具へ馳せて安土にゆきたり。當時變報の四方に喧傳するや人皆之を信ぜず信ぜしと雖も大勢を窺ふて一兵をだに動さざりしは、唯新附の大名のみに非ず、信雄の如きさへも狐疑せしなり、此時身を挺して僅に五百騎の手勢を引卒し難に赴きしは獨り氏郷あるのみなりき。

氏郷は又古主佐々木承禎の子息四郎の刀を執りて従ひしとあり、元より蒲生は佐々木の家人にあらず其麾下に屬したる一城の主なり。况んや此時は冠履地を異にし昔日同僚たりし人に跪づきて禮せしめ累代主君なりし人をも僕従の如く宦官侏儒の辨佞を弄する者と一様に置きしは秀吉の行爲なり、衆諸侯の舉動なりき、氏郷は其間にありて斯る忠厚の行狀あり、賊に彼は拘す可き情味を具へしなりけり。

氏郷は又層々の功を争そひて一事を好む人に非ず、「みちのくの安達が原」の古歌を以ては政宗が所領の争ひを止め、「なき名ぞと人にはいひて」の和歌をよみ家傳の寶器を忠興に贈くりぬ。氏郷の雅量は江海をも容るゝと云ふ可きか、彼焉んぞ加藤、細川、福島等の七將の轍を踏みて石田、小西の孺子輩と豈睡眊する者ならんや、然れども氏郷は大志ありき、豊公に請ひて封を朝鮮に移さんと欲したり、扶桑六十州を掌握する事あたはずんば鷄林の雲を分け鴨綠の江を渡り馬を吳山の第一峯に立てんと望みしなり。氏郷は大志ありと雖も彼れには又情ありき、智ありき、殊遇特待を蒙りし秀吉に背く者ならんや、又其孤兒をも冷遇する者にあらず、然れども足下を得んと欲し扶桑影裡に雄飛せんと望みしは又疑なし。宜なる哉、八十万石の大封を得ると雖も京畿に遠ざかりしを歎息せり。今、氏郷政宗を以て家康に比せんには、一言以て拵ふ可きは氏郷も政宗もその過失は豪放にあり頗る練熟を欠の概あり、家康と云ふ老狸に年壯活潑の氏郷を比するは當を得ざるや論を待たずと雖も、氏郷の欠點は全く豪放にありしなる可し、彼れは狼りに宴席にて事實行なはれざる話柄を弄し天下の後任を喋喋と論じたり、凡小人か醜を容るゝに易きは寡言の人に非ず多言饒舌の人なり、氏郷は饒舌の愚人にはあらずと雖も、家康が笑中に英雄を弄し、田舎の老父の如く朴實にして胸に經綸を蓄する如き者に非ず。やゝもすれば厥の智勇を炫耀し、一世を驚動すること多く爲に讒者の言を人主に進むるの機會を與ふ

るとあり、未だ明哲保身の道に達せし人に非ず。秀吉嘗て徳川家康、毛利輝元、前田利家、蒲生氏郷、浮田秀家等と談笑せし時、氏郷に兵一万を附し、信長に兵五千を與へ戦はしめなば、諸公は何方に附くやと問ふに、答ふる者なかりき、秀吉自ら答ふる様、我は信長に付かん、其故は曹付の首五つを取らば必ず其内に氏郷の首はある可し、然れども信長は四千九百人の首切るとも討死せじと云ひしとあり、以て氏郷が豪勇なるを知る可し、又持重して大經綸を審する人に非ざるを知る可きなり。氏郷もし毒死せしならば、奸人石田叢の爲し、所なる可し、氏郷が石田に對せしは如何なるやを知らずと雖も推考すれば氏郷は決して老猫の如き石田叢の奉行と善なる者にあらず、加ふるに三條殿あり或は淀君の爲に忌まれしにはあらざるか、秀吉豈氏郷を除くに毒を用ふる者ならんや、霸王の一喝彼の封を奪ひ、彼の職を覆ぐに苦しむとあらんや。然りと雖も又可憐なるは蒲生氏郷なり彼は何を憂ひ何を歎き、無常迅速の世をはかなみ一首の佳什を留めて百載の下に悲愴の聲を發し、轉た恨人の青衫を濡はしむる。

第五 眞田

眞田伊豆守信之

父兄に孝悌なりし事

翠柝の音かすかに響き、箒火の影ほの暗し。宵より降り出せし秋雨の小止なく、さなきだに物憂きは旅の空なるに。頃日世の取沙汰は秀頼様の御名を以て石田、小西の輩が、浮田毛利をそのかし上杉景勝と東西より徳川内府を夾撃たんとすの謀略ありとの風評高し。西國の大名は大坂に質とせし妻子のこと心に關ざるに非ず、又東國の面々は徳川の御家いかゝあらむと心を痛めたり。此處は家康の本營を少し距離りたる野州宇都宮の村落犬伏と云ふ所。六連銭の大幕引き、雁金の旗二々流三流夜風にもなびかせぬ、問はでもしるき信州上田の城主甲斐の武田に屬したる眞田といはば、鬼神も憚る智將の隨一安房守昌幸が本陣なり。

安房守昌幸は灯火の下に坐し、右には長男伊豆守信之、左には左衛門佐幸村默然として事を案ずる態

度なり、信之は顔を揚げ恭しく父に向ひ、「石田治部、大谷刑部等が牒狀の趣に由れば兼て風評ありし如く、愈々上方に軍の起りし由、又今度は秀頼様の仰により、家康を追討せよとの文意、父君には早や御同心の由に候へども」と答へつゝ、弟左衛門佐幸村の方を睨みハラ、とこぼるゝ涙を掌もてソト拭ひ、「只今まで幸村が申す所は全く道にかなはざる次第に候」と云へば、幸村は膝を立て短刀の鯉口切りて父昌幸の顔を見、父の眼球動きて差違よと命じなば跳りかゝらん勢なり。されども信之は泰然として動く氣色なく、いよゝゝ畏みて、「父上、父君には年頃徳川家康と御不和の間、また左衛門佐は大谷刑部の讐なり、旁以て牒狀に御同心とは存じ候へども、熟々東西の勢ひを按じ候へば」と云ひつゝ、亦も幸村をハツタと睨み、「秀頼様の仰とは申しながら、未だ御幼稚、なにの御分別や候はむ、世を逝り給ひし前田大納言殿をば加賀の祖父と宣給ひ、徳川殿をば江戸の祖父と仰せられて豈か征伐せよ追討せよとの御意あらむ、察る所、五奉行等の奸策より事興り中老等の調和も術なく終に斯る無名の軍を發せしならむ、信之は先年より徳川殿の御養女本多忠勝の女を娶りし頃、此後は飽までも徳川内府を助けむとは其節申せし次第に候、其時父上にも御同心あらせられたる故、今日まで疎遠ぬ中に候、今更内府に後矢射て永く子孫の恥を残し申す可きや、况んや海道第一の弓取と音に響きし内府公、所詮平場の戦争にて浮田、毛利の輩が勝つ可き道理のなきは明なり。家をも捨て名をも棄て無謀の師

に與するは父君にも似合せられず」と席を叩ひて諫むるに、左衛門佐は激昂し、「信之殿、たどひ御邊の縁邊なりとて徳川家康を鬼神の如くに崇敬し、父を恩人と云ふ如き諫言だて、眞田の家に怨重なる家康を今此時に討たれば、泉下に在ます故太閤の恩義をいつか報せんや」、「黙れ左衛門、秀頼公の御心ならぬ師に與みすが、太閤への恩義に報ずる道なるか、斯る道理も知らずして御年給めされし父上の御心を惑すは不届なり控へめされ」と大喝し、父昌幸の顔を見るに眼を閉ぢて黙然たり。信之は父の志の動かし難きを觀破して、「父君よ、斯くまで諫め奉りても御用これなくば、止を得ず伊豆守は關東の方人いたし徳川の家と、もに興廢を同じう仕るべう候」と、孝心あつき信之なれば熱涙膝に一二滴燃る情の炎を吐息に洩らし、靜に身を起し大幕片手に去ぼりつゝ、顧りみがちに退席けり。

* * * * *

天下分け目の戦は、つひに徳川家康の勝利となりぬ。御大老、五奉行、中老と稱すれば飛鳥も落る勢なりしに、哀れや松尾山の嵐には秋の木葉と散亂し、島津兵庫頭は九州へ、毛利輝元は中國へ、浮田中納言は行方を知らず、石田小西も安國寺も首斬れ、帷帳に在りて畫策せし大谷刑部は戦場の露と消え、難波の蘆の葉すれより太閤殿下の御稜威は實に夢のまた夢となりけり。勝も負るも我が身には悦ならず、眞田伊豆守信之は、悄然として廣間の中に坐し居たり。此家の主人

井伊兵部少輔直政は、關原の激戦に負ひたる痛手を白布にて包み、感じ入りたる顔色にて、「豆州殿、實に云はるゝ如くに候や、」と云へば、信之は虚言かと云へる語勢に激し、顔すこし赤らめ、「御言ども存ぜず候、侍が何とて偽を申す可く候や、只今も申せし如く父安房弟左衛門兩人の爲に私を御成敗なされ度候、」父と弟の爲に急度命を捨られ候や、「相違なく候、不肖には候へども信之も侍の數に候、今度の勳功にかへ一命にかへ安房及左衛門の助命御執りなしを願ひ候。」痛手に屈せぬ井伊直政も、信之が孝と悌には思はず眼蓋をしばたき、「豆州殿同道せられよ、直政が御前の儀は如何様にも取り計ひ申す可し」と、答へ伊豆守と諸共に城中へと登りたり。

井伊兵部大輔直政は、一ト間の中に眞田信之を隠し置き、其身はやがて家康の居間の次にぞ詰たりける。家康は直政を見るより、上の間より聲かけ、「兵部、何事の用あるや、痛手を負ひたる由なるに心元なく存ずる」と云へば、直政はハット手をつき少し動り出で闕の際に畏まり、「別儀にも候はず、眞田伊豆守方へ父安房と弟左衛門が忍び参りしよし」と、申出れば、家康は氣色を變へハット立ちながら、「敵になりし者を、如何になすべきや」と、云ひはなち襖を開けて奥へ入らんとす、直政は此所ぞ大事と前み寄り伊豆守が、卒忽なる儀を申し出し、私る迷惑仕居候、」なに卒忽なる儀と申すと、卒忽とは如何なるとか、「伊豆の申し分あまりに愛に溺れ候得とも、若し御助命無く候は、自分切腹可仕由申候、

伊豆も一度申し出し候儀故、今更變改も仕る間敷候」と云へば、家康も答ふる道のあらざりけむ、「左様もありさうなることなり」と應しのみにて奥に入りたり、兵部大輔直政は思はず打ち笑み席を退りて伊豆守の隠れし一ト間に入り、「豆州殿、御悦あれ、安房殿左衛門殿の儀に依りては、再び御沙汰は有之間敷候。何國なりとも御圍あれ、」とぞ云ひたりけるとかや。嗚呼、伊豆守信之の孝悌は詢に金石を貫徹するに足れりと云はん。

沼田様の事

「御前様申し上まする、只今御城下へ安房守様左衛門佐様御出になりまして、暫時御殿にて御休息遊され度よし、御奥家老より申し出でまして御座まする、如何取計ひまするで御座りませう」と、折目正しき老女役、頭の霜は數年の経験、男に劣ぬ才智を現し、装束さばきも溫柔に手をつかへてぞ申しける。

御前様と稱ふるは、伊豆守信之の内室、徳川家康の養女實は本多中務少輔忠勝の女、上州沼田の城に在すが故に人皆これを沼田様と申したり、沼田様はさすがは本多忠勝の息女なり、「なに安房様と左衛門様の御通行とかエ、シテ殿様には御一所に御歸りかエ」と尋ねれば、老女は「否御城の殿様には、未だ

宇都宮に御在陣の由にあらせられます」奥方は早くも合點し、必定安房殿左衛門殿は上方勢に心を寄するど覺えたりと合點して「更科よ、家老どもに斯く云や、この御城は伊豆守殿御出馬の節急度我に御預け置き成され候故、たどひ父上にては弟の君にては城内へ御入は御遠慮あるやうに申上げ、そして城下の適當き家を御休息所に申し付けよ、」と命ぜしにぞ、婦人ながらも男まさりの方なれば家老用人唯々とし畏みたり。奥方はなほも油断しては危しと思ひけむ、廣間の長刀を下ろし鞘をばらひて侍女に持たせ、襷かひくしく結びあげ、城門を初として水門に至るまで巡回し番兵に守せて事嚴重にぞ見えたりける。

奥方は未だ是にて満足せず、安房守が城下に長く滞留しては事面倒と思ひしにぞ、士卒を送りて出立を急がせんと考へしが、是も亦た男同士は喧嘩の憂あり、如何はせんと思しが、キツト一計を案じ出し、櫻山吹こき交し奥女中の太り肉にて屈強なるに廿人餘に赤前垂を掛けさせ棒を持たせて旅宿に送れり。さなくとも姦しきは女の常、棒突き立て、口々に「御支度よくば早々御立あられまじやう御準備よくば早々御立ちあられまじやう」と聲高にこそ叫りけれ。柔能く強を制すどかや、嬖子軍には、さすがの補延尉の再來と呼ばれたる安房守昌幸も左衛門佐幸村も術を施す道もなく策を行ふ手段もあらず、倉皇として沼田の城下を立ち去りたり。後妻打の陳腐を代へて堂々たる真田征伐の娘子軍となす、沼田

様も亦た真田家の奥方たるに恥ざるなり。信之も脊を撫して忠勝の息女、伊豆守の室は天下の才女と賞賛せしならめ。正に是れ闇燈影暗き邊奇楠屏風の裡に薫る時。

安房守昌幸遺言の事

高野の峯嶺き久戸山の麓、禿の宿は、冬籠り春さり來れど、谷の戸を音信る響もなし。殘雪の籬が下に白きのみ、篋の水の音を寐覺の友と爲ましも今は氷りて尺餘の氷柱が刃と擬ふのみなり。

昨日にかはる真田父子昌幸入道は猿の皮の胴服きて髻蓬々と生ひ、子息幸村は尾羽打からせし滑浪人背戸にて櫓うち破りて在りしが夕餉の時と手を止め、塵うち拂ひて坐敷に入りぬ。

屏風と云ふも名のみにて風をも防がぬ越の二枚折、細もてくゝりし蝶餃ひ、狼の敷皮とりて幸村は坐したり。されど壁には太刀幾腰か掛け、鎗二三十筋鴨居にかけたり。黒木の椽には昌幸が慰の張り貫き炮空を仰ぎて百雷の響を發する姿あり。椽先は十丈の斷岸見あろすは老杉の頂、古松の梢。遙に一帯の蜿蜒として銀の帯をひくが如きは溪流の屈曲して山又山と環り出でしなり。一禽、不鳴、深樹煙、明月不照高僧禪、獨開西窗一詠、清夜、秋河欲墮山、蒼然と詩伯青邱が蟻公の房に宿せし詩趣あれども、主人は禪榻の清風に嘯く人に非らず、讀みさし、見臺の書を枝折りてふせ、「源二郎（幸村の幼名）、我も寄る年波には敵せられず今年は六拾五、去年の秋より病ふして、此頃は少し快氣く山家には

珍しき日和ゆゑ、起ては見たが書物を讀めば勞るのみ最早夏までは六ツク敷この老練と云ひつゝ、まばしありて空をにらみ、「胸に一ツの秘計あり用ひずして徒に死なんや」と頗る慷慨の氣を吐きたり。幸村は小膝をすゝめ、「思召る旨あらば家訓後學の爲に承り置き候はむ」と云ふ昌幸は首をふり、「汝が及ぶ事に非ず。」幸村志ばし黙せしが、「源二郎は足ざる者には候へども、左程に不覺の者と年来御覽候や、素より庸愚の身には候へども返々も愧入り候」と深く恨める氣色なり。昌幸は微笑して、「いやさ、左様に恨ではない、汝が庸愚だから我が志を云はぬと云ひしではない、必竟言の聽るゝと聽れざるとは信用にあり、」と云ひさして源二郎白湯一ツと云ひ、幸村が自在に鉤し釜の湯酌みて出すに喉を沾し、「我は老功ありて人にも信ぜらるゝが、汝が才智は縱ひ我に増るゝも、軍陣の數を積まざるに依り名顯れず、名顯れざれば良策も用ひられず、然れど胸中に思ひこめたる事を空くせむも本意に非ず汝が爲に語らむ。」をりしも山風の吹き入りければ、幸村は、「あまり寒くなりましたる故、松を」と云ひて圍爐裏にバット枯松葉吹きつけて榻にうつせば炎々々々四邊を照して燃えあがりぬ。火影に見れば眞田父子上田の城主に在りけるが、今は昔の面影なく賤山樵と伍を爲して斯くまで憔悴者かと思へば傍見めも憐れなり。

昌幸入道は再び、「三年を過すして關東大坂の合戦あらむ、其の時大坂より我を招んは必定なり、召に

應じて出る時は我を謀主と爲られん、謀主とならば兵二万許を引卒し青野の原に出張し、關東の軍勢を支へんと思ふことは妙計に非ずや」と云ひつゝ、幸村はかと思ふやと裏問ふ容貌なり。はたして幸村には了解せず、「父君の仰には候へども、其御思案は源二郎には悟り難く候、要害の地に據るにもあらず、堅固の城を守るにもあらず、隣國の援を恃にもあらず、二万と云へども國々の集り勢關東勢は十倍ならむ平場は家康が得意に候」と云ひもをばらぬに、昌幸は莞爾と笑み、「我とても親々手段はあらずれど、頼む所は父が多年の武功のみ、家康には泡吹したると度々あれば、二万許の人數を督ひ青野加原に待つと聞かば、縦ひ家康十萬二十萬の勢を率ふるゝも、むざと驅散して通られむとは思ふまじ、五日や十日は評議にかゝらむ、其中に勢多の橋を墮し暫時關東の大軍を支へなば、昌幸こそ家康を喰ひ留めたりと諸國に風評傳はらば、二々心ある大名は關東勢に加はらじ。兎角して手段をめぐらし、家康を江戸に追ひ込まば、太閤恩顧の大名は云ふまでもなく天下靡然として大坂方となるは鏡に懸けて明なり。されど源二郎よ、大野修理の輩がこの妙策を聞き入れざるも亦た明白、徒らに口々へ人衆を散し金城湯池の名地をはなれ、終に豊臣家の滅せんとは疑ひなし、思へば残念なる世運よな」と、あどは涙に言なく父子慈然として相對し、十日の月の影さして壁間には二個の影法師の物思はしげに映するのみ。

眞田左衛門佐幸村

大野修理の邸へゆきし事

「頼まう、頼まう」。大聲に玄關先に聞えたり。大野修理の奏者番は、何某殿の來臨かと取り袴して出でにけり、玄關にゆきて見れば、こは如何に山伏一人突立ちたり。當時城中にて飛鳥も落る榎家と云へば大野の右に出づるものなし。那智黒の砂利に水打ッて十間あまりは花崗石もて幅五六尺に敷き詰めたる、煌々たる表玄關、その玄關に恐るゝ色なき山伏なれば、奏者番は此奴只者ならずと怪みてためつすがめつ凝視しが、「山伏殿は何方より來られ、何用ありて」と立ちしまゝにて尋たり。幸村ワザト小腰を屈め手をつけて、「私儀は大峰邊の山伏に候ふ、傳心月叟と申す者、御祈禱の卷數差上御目見を奉願候」と恭々しくぞ演にける。奏者番は言葉遣ひも荒々しく、「殿には御登城にて御留守なり、しばらく御控なされ、此方へ」と、さすが内玄關にも廻さうりしが番士の詰所に案内せり。番士の常として浮世評判も爲盡して、己が刀の話とあり、「いや何に十一郎殿、貴殿の御刀は志津に候とな、なに〜太郎左衛門殿のは義弘とな、ヤ、御美事〜侍はかくありたし、小袖袴は如何にあらう

とも腰の物こそ第一番、なる程と眞偽は知らねど本人の言のみ聞、鑓子先より鑢元へと打ち返し〜熱視め居たり。をりしも幸村の山伏は案内に連れて來りしが「若侍の遠慮なく修驗者には刀脇指御所持の様子、少々拜見」と云へば、幸村は打笑ひ、「山伏風情の刀脇差大威しは申す迄にも候はず、志かし何も御坐興御覽被下れよ」と差し出す刀脇指、番士は眼と眼を見合せて、扱かば猫奴が噛み附かん赤鬨ぞと推測し、先づ刀をばスルリと扱けば此は如何に思ひがけなき玉散る光り、夏の夜の月影、緑樹の間に村消えて霜かど匂ふばかりなり。若侍は打ち驚き、「御脇指は」と俄然に言語の改まりしものと可笑し。脇指をも扱き見ればこれも同じく臘月夜の木の下に霞とまがふ櫻にて、振らば薫らん心持せり。「御中身は」と愈々體み中身を見れば、宜なる哉刀は正宗、脇指は貞宗と銘をぞ切つたりける。番士は幸村の顔しげ〜ながめ唯者ならじと思ひける時、玄關先に聲して御歸と云ふ報知、番士はペラ〜と走り出でぬ。大野修理は奏者が山伏一人御目見を願ふと云ふに何者なるかと不審しつゝ、詰所より出で來る山伏傳心月叟を見れば、待ちに待ちたる眞田左衛門佐野幸村なり。是は是はと計り、修理は幸村の前に畏まり、「近日御越とは承はり候へども、早速の御出、秀頼公にも定めし御満足、先づ〜あれ〜あれ〜」と書院へ通し、御酒よ御肴よと饗應たり。程なく御殿より速水甲斐守上使として來る、秀頼公より被下物は黄金貳百枚銀三十貫目旅宿の手當な

り。番士はアツケに取られぬ。山伏は智將と其名の轟きわたりし幸村なりと知りしかば興をさまして居たりしとぞ。これなん大坂冬陣の前にあたり、父昌幸の死後幸村が秀頼の召に應じて来りしさまなり。

幸村節に死するの志を豫め一定せし事

大坂城の出丸の中、真田左衛門佐が去年より住居せし陣營なれば、假小屋とは雖も黒木作りもなかなかに茶味ありて又た面白し。

主人幸村は昨日にかはりし上下姿、千軍万馬の間を往來して、勇士猛卒を叱咤せし暴威もなくして物柔しく、隼人殿、貴殿とは年來の御恩意、かく打解て御物語仕つるは、幸村實に嬉しく存ず」と云へば、原隼人は鬼髯左に握みながら、「ムウ、敵となり味方となるは、武士の常なれど、かく秀頼様と御和睦になり、云はるゝ如く貴殿とかく小酒宴いたすは拙者も大悦で御座る」と、むかしは甲州にて名を轟かしたる原隼人佐貞胤、今は越前忠直の家にて名有る覺の者どものみと聞えたる御使番となり金の九本の馬蘭の指物を輝やかしたり。

今日は東西和睦となりし故、舊友なれば真田に招かれ種々の馳走になり、幸村は小鼓うち子息大助は

曲舞二三番舞ひて亂舞のありし後なり。真田は自茶を點じ隼人佐の前に置き、釜に水に移しながら、「隼人殿、幸村は今度討死仕る可き身に候が、思ひがけざる御和談にて今日まで命はながら一居り候へども、貴殿と二度の見参は有之間敷候はむ、一旦は御和睦になり候ども、再び御弓箭に罷り成る可きは明白にて候」隼人は茶碗手に持ちながら、目をしばたき、「仰する如くに候、天に二ツの日なしとやら、徳川家の將軍職に在る上は秀頼様が江戸へ御参勤になるか、御城を全く御渡しになり、大和和泉攝津の國持大名とせらるゝの外には無事には濟むまじく候、貴殿とは武田殿の御館以來の御恩意に候へども、あはれ武士は果なく候」と云ひつゝ、頰りに落涙せり。「仰する如く」と應へつゝ、幸村は茶碗を受けて洗滌をばり、自服の茶味に舌を齧ち、茶儀を終りて、隼人佐の傍に坐し、「床に飾りし甲冑を指さして、「御覽候へ、鹿の抱角打たる冑は真田が家の重代の寶、父安房守が譲りて候、次の合戦には此の甲冑を着し討死仕り候はむ、抱角の冑首を御覽に候は、幸村が首ぞと思召下されよ其節は一遍の御回向を願ひ奉り候、さりながら幸村は忠義の爲に討死いたすは武士の道と存じ候へども」と背後をかへりみ、畏り居たる大助を見て、「悴などは是ぞと思ふ世の中の事にも出で合す、高野の奥の詫住居に生長いたし、やうやく十五六歳になるや否や、戦場の土に埋めむと不便に存じ候」と親しき友には隔なく意中を吐きて語らひたり。

原隼人佐はまたも涙を流し、「御尤に候、戦場に進む身は誰か前後を定む可き、某も必ず其途にて御參會申すこと尤に候」と、鼻うちかみて黙然たり。幸村は小姓に命じ、庭前へ白河原毛の太く遅しき馬をぞ引き出ださせける。やがて真田は六連錢を金にて摺りたる白鞍置きユラリと乗りて五六返地道より亂足に乗りをさめ、椽先に腰うちかけ、靜に汗をふきながら、「重ねて御合戦あらば御城は破却せられたり、平場合戦なる可し、さらば天王寺表へ乗り出し、關東の大軍を驅散し、此馬の息の續かむはどは戦ひて討死仕る可くと存じ入り候へば別て秘藏に候」と云ひつゝ、小童呼び、「酒もて來よ」と命じ、これ今生の暇乞ひ、呑めや舞へや、武士の交面白やと夜半に至るまで舞ひ遊びしとかや。翌年五月七日はたして幸村は、彼の鹿角の冑を着し件の馬に乗り討死しけるぞあはれなる。實に英雄の心腸は憂然たる佩玉の響ある溪流に似たり。久度の幽谷に湛然たる清泉は激して汚濁の澗江に一條の奔流となり、つひに幽冥の海に没しぬ。

夏御陣五月五日の合戦の事

五月五日の黎明に物見の兵は馳せ歸りぬ。左衛門佐幸村の前に來り、旗三四十本人衆二三方計國府越より此方へ越し來り候。と云ふ又々一人の物見は馳せ歸りぬ、分明には見え難く候へども、龍田越よ

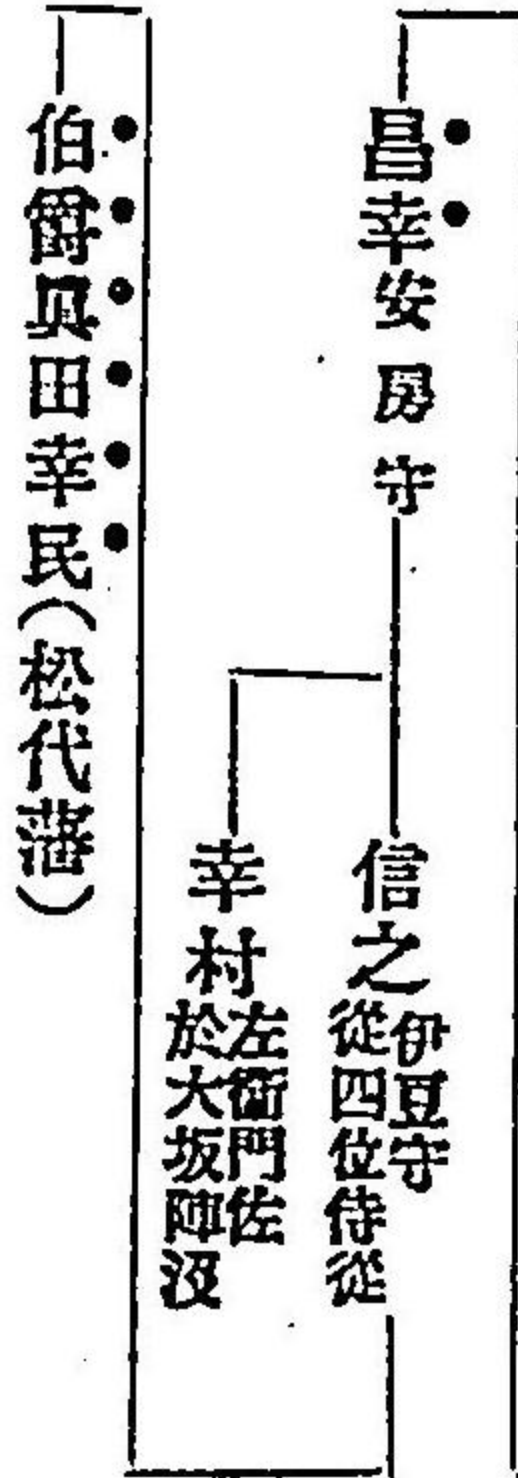
り人數二方計押し寄せ候と云ふ、逸氣に逸やる若武者は左衛門佐殿の御下知今やある、伊達政宗にもあれ、松平忠輝の兵にもあれ一戦に突崩さむと動搖きたり。されど幸村は障子にもたれ片膝立て、虚眠して居たるのみ、注進は櫓の齒を引くが如し、やうやくにして眼を開き、寄せなば寄せよ來らば來れ、一所に集て討ち取らば心地よけむと云ひしのみ、再び一語も吐かざりき。やがて夕炊もをはりし頃、幸村下知して曰く、「いざ敵近く寄らむ押し出せ」と、一万五千餘騎は正奇を亂さず前後を混ぜず次第をど、のへ、旗鼓凜然と進みしさまは何百万騎もたゞ一息に攻破らむとぞ見えにける。其夜は河州道明寺に陣を取り、翌れば六日の早旦に野村邊にぞ進みける。はや此時は城方の勇將渡邊内藏助紀が水野勝成と手痛く戦ひて切腹けたるをりにして、紀は使者を幸村にあくり深手を蒙り候故、脇に引き取り候と云ふ、幸村は馬上より式代し、「渡邊殿の御劔眼を攙し候、是よりは幸村御受取り申し候」と答へつゝ、肅然として進みゆけば、關東勢も水野にかはりて伊達政宗ぞ進みける、龍か虎か風か雲か天下の壯觀。幸村あたりを眺望れば、前後は岡にて中間十丁ばかり平かなり、左右はをりしも田植時早苗採りしもあるさまなり、幸村キツト心に思案して、使番を呼び諸勢に冑を着よと命じけり、兵士はさきに令ありて冑を着すな、槍を持つなど命ぜられ、敵合十町計に進みし故、こゝに使番の「令を聞くやいなや冑を取て着、忍の緒をシツカとしめたりければ兵氣一振していかなる天魔波旬

も當り難くぞ見へにける。
 敵合已に一町となり、又もや令して槍を取れと命ぜしかば、穂先を揃へて進みたり。千丈の巖も觸れ
 なば碎る可し、万丈の山岳も當らば崩されなん。曳々と岡の上に押し上ぐれば、待ち構へたる正宗が
 先手の騎馬武者百雷の轟く如くに、鐵砲八百挺を一度にドット放ちたり、飛び散る砲玉は霞の如く電
 の似く、煙漠々と立ち籠めて咫尺の間も見えわかず、真田の先手の兵士は混々と打斃され、算を亂し
 て倒れたり。幸村は聲ふりたて「爰をこらへよ大事の場ぞ、片足ひかば全軍没せむ」と下知する聲
 の煙の中より開ゆるにぞ、たい槍の柄を握りつゝ平伏してぞこらへける。幸村またも號令して、炮聲
 の絶間／＼に十四五間づゝ走りゆきては、居り敷きて砲煙の薄らぐごとに進みたり、杉先がりの先
 鋒は真田が一万五千の軍勢中離れなる可しと尋ねれば、大將真田左衛門佐滋野幸村なりき。幸村令し
 て、我が鎗より先へ一尺進みし者あらば今日第一の功名なりと云ひたれど、一人として幸村が鎗先よ
 り一尺先へ進みしものはなかりしとぞ。嗚呼、烏合の兵を引率して譜代相恩の關東武士を切腹かする
 腕前は全く爰にありしなる可し。伊達政宗の騎馬武者は二男三男の臂力あるを擇び、馬はもとより奥
 州立ちの駿足なり、馬上より一齊に鐵砲を打ち放せば中ね玉は稀なりとぞ、打ち立てられて備の亂る
 所を煙の下より乗り込むで馬蹄に駈散すに敗軍せざる敵はなかりしなり。

されど此時幸村が軍勢は、打るゝ味方の遺骸を踏み越え、穂先を揃へて早や近々と居り敷きたれば、
 さすが勇武の騎馬武者も暫時猶豫を色を見て、幸村は突立ちあがり大音聲にかゝれ／＼と采配振つて
 叫びしにぞ、なにかは躊躇ふ可き噴火山の破裂するが如く、河堤の崩潰するに似て轟々然と突出せり、
 黒煙の裡に閃くは、電光ならず真田が兵士の鎗先なり、閃電の目を射る間に響きわたるは、幸村が軍
 勢の足並揃へて大地も裂よと進みゆく足音なり。倒るゝ馬、落る武者、バラバラと散亂し、さしもの
 伊達の騎馬武者も七八町を追はれたり、關東勢は再び戦ふ勢なく真田の兵威は四邊を拂ひて操り引き
 にぞ引きあけける。

●清和天皇々子貞秀親王裔

○海野小太郎滋野幸恆 — 幸隆 眞田眞正 忠 一 徳齋



幸恒二十七代の孫に小太郎幸隆あり、この人眞田の庄に住せしより、初めて眞田彈正忠と名乗りぬ。幸隆の父海野左京大夫幸義は信濃更科の住人村上義清に討たれ、幸隆は所領を失なひ上州箕輪城主長野信濃守を頼みてありき。をりしも甲斐の武田大膳大夫晴信が信濃國を打ち從へん志ありければ、先づ幸隆をば招きたり、幸隆は大に喜び如何にもして父の仇を打ち武田に忠を盡さむと思ひ、天文十五年の冬やうやくにして村上義清を欺き宗徒の侍五百人をば己が城中に引き入れて一人もあまざらず果せり。かゝるとより村上終に滅亡し信州一圓武田晴信の領地となりしとぞ、全く幸隆の功なりとて武田の家に重く思はれたり。

幸隆入道して一徳齋と號し六十六才にて卒せり、眞田の中興はこの幸隆入道となす可し。入道の子源太左衛門信綱、兵部昌輝は天正三年五月廿一日長篠合戦に討死し、三男安房守昌幸其家を嗣ぎたり、武田亡びて後織田信長に降り、信長討れ去後は信濃の住人一同と上杉景勝の被官となりぬ。然るに北條氏直が大軍を率ひて信濃國に亂入すると聞き、北條と心を合せ裏切して景勝を討んと爲ししが、この時も亦た中途より變心し北條に背き徳川家康に従ひたり、その頃北條の領地上野國沼田の城を始とし近傍の城八ヶ所を切り取り、嫡子伊豆守信之をして守らしめたり。小牧の戦の後に北條氏直より徳川家康へ使者を送り、昔し北條徳川約束を結び武田の領地を分ちて

甲斐信濃は徳川が所領となし、上野は北條が領す可しと定めしなり。眞田の亂妨は其意を得ず早く沼田城を明けわたさる可しと云ふ、徳川家康は眞田に命じて沼田城をば北條氏直に明け渡せしめむと爲しに、眞田昌幸は敢然として其言を入れざるより、又徳川との弓矢となりぬ。昌幸も北條徳川とを敵にとりては六ツヶ敷とや思ひけむ、又もや景勝に援兵を依頼して上田城に立て籠もり、上杉勢と諸共に北條徳川二家の軍勢をば打ち破ふりたり、この時昌幸は次男幸村をば上杉の家人に爲し領知さへ受けたるに、亦もや豊臣秀吉に心を通じ、景勝を欺むきたり。

沼田の城より事發り小田原の北條は亡びしが、眞田は本領を安堵せり、後に上州は徳川領となりたれど沼田は伊豆守信之が初の如くに領したり。この頃より信之は徳川家康の被官となり、左衛門佐幸村は大谷刑部少輔の御となり、こゝに及びて父子兄弟の東西に分る、端をば開かれたり。

關ヶ原より大坂の役に至り、昌幸幸村は始終豊臣家の爲に力を盡し、信之は愈々徳川家の爲に無二の忠臣となりけり。昌幸は多度山の麓の開居に死し、幸村は大坂方の元帥の印を帯びて花々敷ぞ討死しける。是より眞田の血統は信之を祖とし、代々信州松代の城主にして十萬石を領したり、信之は嫡孫信澄に家を分つて沼田三萬石を領せしめしが、今は松代の家のみとなりぬ。

元和偃武の頃はひに幸村は其武を大坂に輝やかし、關ヶ原の役には昌幸其智を上田の孤城に於てあら

はし、關東の荒武者の肝膽をば寒からしめたり。真田昌幸幸村父子の如きは、韓信に比す可きか、彭越に擬す可きか、將た孔明と稱す可きか、一時六連錢の旗影は世を風靡して天下に敢て抗する者もなき勢なりき。

志かれども、昌幸幸村は不幸にして信濃の山間に人と爲り、智あり勇ありしと雖も、嘗て韓彭が百万の師を率きひ、孔明が屯田の制を設けて徐々に中原の鹿を追むと爲すが如き大經綸は、試しとあらざりしなり。真田昌幸は大國の間に挿れたる一小封土の君なれば、朝には上杉に臣禮をとり、夕には徳川に仕ふ、或は北條を敵とし、或は豊臣に屬し、辛くして上州沼田の一城を保ち餘喘を息つくが如き信陽の小英雄もあはれむ可きかな。

然りと雖も真田三代が信濃の一隅より崛起し、一時天下に仰れたるは、彈正忠幸隆が力なれども幸隆の如く亡國の君が俄に立ちて一方に雄視したるは職として武田晴信入道の餘威と云はざるを得ず、武田氏亡びたり、真田も亦た殉するか或は遺孽を養ひて武田の名を存ずる道を計る可きなり、昌幸は意志茲に在らず甲信亡國の餘威を以て徳川氏に抗し上杉を賣り、北條と争ふ、天下の大勢を観るもの、組せざる所なり。昌幸は智か愚か、恐らくは當時昌幸が如き逆流の地位に在る者は勢かくの如き術數を用ひざらむと爲すも須ひざるを得ざりしならむ。武田の一門附屬は殆んど皆な戦没せり、然らざれば

は膝を徳川氏に屈し五斗の爲に三河武士の侮慢を蒙りたり。昌幸は單り此間に在りて上田城に據り隠然信陽の武士の牛耳を執り、徳川氏に一強敵の威を與へしめしは彼も亦た碌々の大名に非ず、若し太閤殿下の嚮をして長からしめなば、機を見て伏見大坂の間に翺翔し脚翼を延ぶるときもありしなる可し。幸村を以て大谷刑部と縁を結び、五奉行の輩と事を計るの門は既に開きしなり。昌幸の如き機巧多智の士は家康の好む所に非ず、昌幸も亦た仁義を粧ひ韜畧を養みし家康には仕ふると能はじ、彼も亦た一個の度量なき韜畧家なればなり。

抑、人の社會より地位を失ふとあるや、之を救ふに兩途あり、失敗の結果に服従し小心翼々として靜に其回復を計る一なり、機巧を運らし變通自在の道を極め逆風を叱咤し鯨波を突きて風力を中心をのぐるゝに在り、二なり。

第一の途をとる者は尋常の人にして十中の六七は回復の望あり、第二は非凡卓絶の者にして十中の八九は興復の目的なし。真田一家は長篠の敗軍以後、武田氏と、もに戦國社會に地位を失ひたる者なり、昌幸は己の智を頼み全く第二の策を取り千障を破り萬難に勝ち、一條の活路を豊臣氏に求め中原に進むの道を拓かむと欲せしなり、然れども彼はあまりに變化自在にして、朝暮に變節するに馴れたり暗黒の戦國の士さへ眉を擡めて其節操の頼み難きに苦みしなり。

昌幸は智餘りありて器は未だ大ならざりしなり。幸村は智あり勇あり能く三軍を統帥する力を有せし者なれども、浪華城頭夕陽春くの時なれば、空しく礮を横たへ歸鶴の樹を匝るを觀て涙を流すの晩運に出でしなり、頗る義烈の行爲ありき、父昌幸より一段の士氣あるを覺ゆるなり。

父昌幸、弟幸村に反對し温厚篤實にて加ふるに智を具へしは伊豆守信之なり。信之は實に地位を回復するに第一の策を用ひ一旦徳川家康の養女本多忠勝の女を妻と爲しより、二タ心なく徳川氏に仕へ節義の爲に父と分れ弟と離れ、弓を父に對して引くが如き位置に立ちしと雖も、關ヶ原の亂をはるや身命爵祿を捨てて父と弟との性命を救はむと爲せり。信之は實に戰國洪季の世に嘆賞す可き人なり、信之には幸村昌幸の如き赫々の名譽なく、いちじるしき武功を見ずと雖も、武邊巧者の人にして恰も父と弟との才智を柔和篤實の白衣を以て包しに似たる者なりき。眞田氏の廟食する其因ありと云ふ可し。

第六 相馬

●桓武天皇皇子式部卿親王孫上總介高望裔

●平將門

盛胤相馬彈正大弼

義胤長門守

利胤 大膳大夫

充胤大膳亮

誠胤 子爵相馬順胤 (中村藩)

相馬彈正大弼盛胤の彙祖を尋ねるに、桓武天皇第五皇子一品葛原親王の御孫高望王に平姓を給ひ上總國を賜ひ、大守とならせ給ひしより、御裔人臣となりぬ。朱雀院の御宇平將門下總國相馬郡より起り常陸の國を奪ひ、坂東を伐ち其國司も彼が猛威にあたりがたく、つひに下總國猿島に都をたて譜して平親王と名乗りぬ。百官を置き百寮を設け飛鳥を落し落日をさしまねきしが官軍に破られ一門一族ほとんど皆な誅せられたり。こゝに將門の從弟に村岡二郎忠頼と云ふ武士あり、陸奥に住せしが其子孫次第に領知を廣くし本領相馬郡は失なひたれども、伊達、二本松、蘆名、佐竹の豪族どもに東北に屈指の大名とはなりにけり。中興の祖、彈正大弼盛胤は慶長六年七月七十三歳にて卒し、其子長門守

義胤、大問秀吉に従ひ本領を安堵せり。

慶長五年の秋、關ヶ原の役に相馬義胤は佐竹義宣と計り石田小西に同心して、徳川家康の催促に従はず、天下家康の掌中に歸せしかば所領を沒收せられたり、然れど東北の名門なればにや、慶長九年徳川秀忠の嫡子誕生せしを祝ひて逆臣與黨の罪を赦し、義胤が子大膳亮利胤を召し出し本領をば與へたり。大坂の役には相馬利胤、徳川秀忠の先陣うつて馳せ向かひたり。寛永二年九月十日四十五歳にて卒す、其子虎之助幼稚なりければ祖父長門守義胤後見して國政を治めたり、寛永十一年八十八歳にて世を逝り、虎之助叙爵して大膳亮に任じ慶安四年三月五日三十二歳にて早世し、長門守忠胤家を嗣ぎたり、忠胤實は土屋民部少輔利直の二男なり、義胤の女子を妻とはしたれど、是より相馬は源氏になりしと云ふ可し、土屋は甲斐源氏金丸筑前守源虎義の裔なればなり。

家の紋は九曜の星に繋ぎ馬。幕府の頃、上屋敷は外櫻田、大手より十三丁。參府は四月にて子寅辰午申戌の歳、御暇は丑卯己未酉亥、献上物は鹽硝七箱金馬代、拜領物は巻物五なり、時献上は申海鼠、初雉、初菱喰(雁)、初鶴、等なりしとぞ。居城は與芻宇多郡中村、江戸より七十八里、領知六万石と稱すれど累代の所領なり小藩の諸侯と雖も昔時より内福の聞ありしとかや。重なる家臣には岡田、堀内、泉、泉田、相馬等の諸氏ありき。

長門守義胤

金澤忠兵衛の事

金澤忠兵衛は刀提げ愁然として玄關を上り、迎ふる妻子をも顧みず、奥の一間にトツカと坐したり。忠兵衛の妻はしどやかに手をつきて、「下々の風説には大殿様には御逝去の由、殿様には未だ御若年陰ながら及ばぬ私どもまで御察じ申して居ります」と云へば、忠兵衛は袴もぬがず羽織も脱ぎ脇指さへも其儘なりしが、「御老林の事なれば長くは御在世を望まれぬぞ、今暫時御察昌を願ひしに御逝去あそばされたぞ」と、あどは涙を鉄拳にて押し拭ぐひ、脱け残りたる齒をキリキリと噛み鳴らしたり。をりしを玄關に「頼う」と音訪るは同僚某なり(氏名を失す)奥州侍の朴實姿、懇意の間とて案内を待たず、「忠兵衛殿御免」と云ひつゝ金澤が居間に入りぬ。互に主君の逝去を傷めば物をも云はず時の挨拶もなさず、「忠兵衛殿、残念に御座る、大殿様には大問殿下の小田原攻の頃よりして關ヶ原の時に強き御苦慮を遊ばされ、累代の家臣を浪々の身とせじと、やうやくにして本領御案堵、徳川家の御代とな

りてよりは、利胤君の御後見、續ひて當殿様の御幼年より内外の御配慮り、志かるに今度の御不幸、拙者は世に居る望みも御座らぬ、悲憤慷慨髪冠を衝く勢あり。金澤忠兵衛は、某が口角沫を飛ばす話も聞くや聽ずや、俯視きて答へもなさず、たいをりくに熱涙を拳もて拭ふのみ、夫の歸を待たむとて妻が加ざし爐の火の春となり、松風ひしく釜の音盡なほ小暗き思あり。

某は金澤忠兵衛の黙して一語も云はざる故、明日參上致さむ」と、刀提げ立ち歸りぬ。忠兵衛は見送りて再び坐に復り、太息をつき、「父備中に至るまで、金澤の家十一代、相馬に仕へて二タ心なく干戈の間に命を落して君に忠をばいたしたり。思ひきや我は泰平の御代に逢ひ、空しく君恩に浴するのみ、皺腹切りて御供せずば、黄泉に行きて豈に祖先の人々と面を會す可き、然なり、然なり」と、點頭き居たり。

* * * * *

昨日、金澤の家にゆきたる某は狂へる如くに身を戦栗し、「忠兵衛殿、御救あれ、昨日は無禮を致せしぞ、殉死の御考ありとも知らず、猥に物を申して御邪魔を致したり、拙者も忠義は貴殿には劣り申さぬぞ、大殿様の御供には一人よりも二人と存するなり、待れよ、金澤氏、忠兵衛殿」と、大息つきて獨り語つゝありけるが、某は獨身の氣安さ若黨一人に用事を云ひつは出し遣り、門の戸緊と閉ざし、垣

越に見ゆる金澤の家の屋根をながめ、「ア、お手柄なり、忠兵衛殿、然れど腹切りて御供するは、拙者も貴殿には劣り申さぬぞ」と云ひながら、靜に上下を着し、香一辨をくゆらし佛壇より親の位牌を取り下し小机の上に置いて、まばし念佛稱へしが、上下の肩刎のけ、氷のごとき短刀逆手に持ち、腹を擦りて眼を閉ぢ惜げもなく十文字に掻き切りたり。或人之を論じて曰く、金澤は義死なり、某は俠死なり、若し此義俠を聞きて子孫の爲に美名の爲に殉死するものあらば、之を利死と云ふ可しと、旨ある哉この批評。戦國の餘孽歎ずると多し、然れども金澤と云ひ、某と云ひ、慷慨死に赴きしは尋常の士に非ず、この義俠の士を養ふ義胤は又た尋常の君にあらざりしなる可し。

大膳亮利胤

伊達政宗と和睦せざりし事

前にも掲載し如く、義胤は所領を沒收せられ、累代の名家も断絶せり。然るに伊達政宗は徳川家康に訴へて曰く、相馬は政宗と年來の敵國なれども、上杉征伐の爲に下りし時、伊達の條下を參看すべし一夜相馬の城下に宿りしに、厚く待遇たり、もし上杉、石田等に合陣一味せしならむには、必ず其時

に政宗を害す可きなり、これ野心なき證據には候はずや、又相馬は累代弓矢の家に候、今日に至りて斷絶するに實に不便に候とぞ申しける。この政宗が歎き家康の心を動すに力ありて、つひに本領を安堵せしなりしとぞ。

七十八

政宗は後に井伊掃部頭直孝を仲立ちとして、年來の宿怨を解き和睦せむと欲せしに、利胤は威儀を改め、直孝に對ひて曰く、「伊達政宗殿の芳志を以て、本領を安堵せしと、利胤決して忘却は仕らず、さりながら年來の敵國たるとは、利胤一人の怨に非ず祖先に對し中直り憚かりなきに非ず」と、凛然として答へけるとぞ。宿怨を忘れざるは有徳の事に非ず、况んや政宗には恩あるをや、されども亦た當時の武士が一身の利得により、かの弓矢の道を捨ず祖先を重んじ輕々しく、爵祿の爲に武士道てふ真心を屈せざりしは豈又善みす可き事にあらむや。

相馬氏は奥州に於て累代の名家なりと雖も、平親王將門以後中原の舞臺に鹿を追ひし家に非ず戰闘も多くは皆な隣國の小迫合のみ、白石の藩翰譜にも相馬累代の中に北畠中納言顯家に從ひて勳功を顯し、者ある可きに惜むらくは家譜に見えずとあり。

相馬氏は東北の名族なり、猛將勇士ありて鎌倉室町の代に花々敷戦争もありしならむ、又國人の歸服せしとも他の大名の及ぶ所に非ず、既に金澤氏の如きは十一世相馬家に仕ふと云へり、士を遇するの道

も厚かりしならむ、士氣も亦た敦朴にありしなる可し。義胤が猥に大勢を窺ひて徳川氏に阿附せざる、利胤が毅然として井伊直孝に政宗との和睦を斷絶する、轉た名門の君主たる風采を視るに足れり。藤原氏の末より領せし地を明治の初年に至るまで世襲の地となし、繫ぎ駒の嘶き高く東北に鳴らしたるは稀有の諸侯と云ふ可きなり。

第七 北條

●北條早雲長氏五代

○平氏直左京大夫從四位

氏規美濃守氏康四男

氏盛美濃守氏規男

子爵北條氏恭(狭山藩)

北條美濃守平氏規

河内國丹南郡狹山を領せり、僅に一万石の諸侯なれども、其昔を尋ねれば、關八州を領し小田原に金城湯池を築き、函根碓井を西の關となし、洋々たる坂東太郎利根の大江を濠と爲したる、北條早雲の正統なり。

小田原の城破れし時、北條氏康の四男美濃守氏規は豆州韭山城を守り、關八州の諸城は落るども、やはか韭山は敵軍にわたさじと氏規の軍配に寄手も攻めあぐみてぞ見えにける。其時、徳川家康より使者を遣りて、小田原は和睦の事成らむとす、既に貴殿の武名は天下に顯れたり、韭山のみを守りて討死

せむも無益なる可し、早く城を出でよと勧め、氏政氏直の父子よりも其城徳川氏にわたさる可しと下知せしにぞ、氏規止むを得ずして家康の陣中に来り、伊豆相摸武藏の三ヶ國をば氏政父子に與へ、殘る關東の所領は盡く關白に獻ず可しと議しをはり、天正十八年七月六日卯の一點に小田原城の濫取口より城中に入りぬ。

噫、百有餘年東海に威を震ひたる、北條氏の社稷も倒るゝ時や來りけむ、美濃守氏規の苦心も水泡となり、この時氏政父子の間に違亂を生し、氏直のみ同じ日の卯の一點に城を開ひて北畠信雄の陣門に降りたり、勢かくの如くなりければ氏直のみは死をなだめられ、氏政と弟陸奥守氏照は自害す可しと定められけり。氏規今は力なく氏政の介錯し、返す刀にて己も自殺せんと爲し、に、警固の武士に飛び掛りて押へられ、刀をば奪はれたり。白秀吉もかねてより、氏規の人と爲りを知りしかば、様々に慰められ終に氏直の供して七月十一日に高野山にぞ上りける。

有爲轉變の浮世なれども、月の上旬までは關八州の大守北條氏直、豆州韭山の城主美濃守氏規なりしに、おはれ今日は侍少々召し具して蹈みも慣はぬ旅の空、後邊を遙に顧れば富嶽の東に白雲のたちこめたるは函根の峯ならめ、住みなれし殿居は今は何國の武士の夢を結ぶ所となりし、夏野の小男鹿、春山の雉子、今日よりは誰が征矢にふれて倒るゝや、人生は夢なりけりと武士と思へる人々も征衣

露けく覺えしどかや。

其年の冬、氏直高野より天野に下り、翌年關白秀吉に對面し、領地を受くる由なりしが、三十一歳にて痘瘡を患ひて死したり。

其後、關白秀吉より氏規に狭山にて一万石を與へたり。一劍を杖とし終に關八州の覇業を爲せし伊勢の浪人、今川の寄客伊勢新九郎長氏入道早雲の鴻圖も早川の淵瀬とかはる世の例に、雲霧々水濤々ど空しく早雲寺裏の蒼苔に蝕せし一基の墓碑のみとなりて終りぬ。

北條左衛門大夫平氏勝

左衛門大夫氏勝は福島左衛門大夫綱成が孫なり、この綱成と云ひしは上總介正成の男にして、正成は累代駿河の今川の被官なりき。上總介正成は武田信虎の爲に討れしかば綱成は相摸國に落ち來り、終に北條氏康に仕へしなり。この綱成の容貌ことに麗はしく、又名高き上總介の子なりければ氏康の寵愛一ト方ならず、廿二才より男となり、氏を賜ふて北條左衛門大夫と名乗りぬ。川越城を守りて拔群の功を顯し、甘細の城主となりて甘細左衛門大夫とも稱したり、大戦にあひしこと三拾餘度、小戦は

數を知らず向ふ處を破らずと云ふとなし、指物は黄絹に墨にて八幡大菩薩と書したれば、黄八幡と名附けてこの旗風に崩れざる敵はあらざりしどかや。嫡子氏繁も父に劣らぬ剛の者十六歳にて初陣し、敵十三騎を切て落とせり。其子氏勝も亦た祖父と父とに劣らざる勇將なれば、十餘度の戦争に一度も不覺の名をとらず、小田原の役には山中の城を守り、落城の後に甘細に引き籠り、城と、もに討死と心を決せしが家康の勸に従ひ、徳川に降り上總國岩槻にて一万石を領し、其子氏重遠州掛川にて三万石を領せしが世嗣なくして家斷絶せり。

福島辨千代丸の事

天文七年の秋、上杉五郎朝定は八万餘騎を引率し、武州川越城をば十重二十重に圍みたり。かくと聞くとより北條氏康は僅に八千の兵を引き具し、後卷きせむと出でたれど、其由城中に通ずる道なし。氏康は沈吟し、「鳥ならではかよふ路もなし、蟻ならでは入る可き道もなし、左衛門大夫綱成にいかになさば便を通ぜむ」と、うちあぐみてありけるが、側に伺候せし辨千代丸は氏康に打ち向ひ、「味方の謀計を城中に通せん」と容易には候ず、も志雜人原に御文を渡し敵に奪るゝとも候は、捕はれて問ひ落されむは一定に候、所詮、辨千代御使を蒙り兄綱成に御文をわたし可申候、萬に一ツ敵の手に捕はれ、

いかなる拷問にあひ候とも問ひ落さるゝとは候まじ、君の御爲には討死いたすも、責め殺されむも一様候と、言葉涼しく云ひ出でたり。氏康は寵愛の美童辨千代丸の必死の氣勢に、一トしほ愛やまゝりけむ、辨千代を暫時く凝視め、健氣なり辨千代、主と兄との爲に一命かけて使者にたつかと、勇武の將も懇懇の情は断ち難く、ためらひしが頓て矢立の墨すり流し、さらりと秘計の筋を認めをばり、左衛門大夫殿へ氏直と書き判し、辨千代丸の手にわたし、「往け首尾よく爲よ」と云ひつゝ、幕をしぼりて辨千代の手を携へて立ち出づれば、をりしも頃は七月十五日月皎々と照りわたり、建て列ねたる刀槍に輝めくさまは、覺ず肌膚に粟するばかりなり。

辨千代丸は齡十八の美少年、甲冑はわざとぬき、腹巻ばかりして細身の太刀を佩き白衣もて緑の黒髪まツかと結び、八寸にもあまる黒駒にゆらりと跨り静に手綱をかひ操りて、本營より一二町あゆませしが、舍人にも歸れと命じ、明月に鞭を揚げ敵陣として走せけり。

辨千代丸は斗大の膽をもちしか、上杉の陣營近く來りしに、會釋もなく陣門に乗り入れ、ツト駆けぬけて川越城の大手に近く乗り附けたり。上杉の番士らも月影に映ふ見れば、女にも稀なる少人が追風に髪ふり亂し、をりく見かへる顔は腫に霞む李花の似く月を踏むて驪にまたがる襟は此世の人とも思はれず、たゝアン、アン、と指さす間に、一鞭くれて跳せしが六尺の逆茂木をヒラリと乗り

越し大手の門に馬を止めぬ。

* * * * *

其夜も子の刻に近づきたり、城中より合圍の狼烟、上杉方の番兵は此處彼處に倦み勞れ、鎧の袖を片敷て兎の下の蟋蟀、懐郷の夢をさそふをりしも、北條氏康は選びに擇びし軍兵を引率し、月下の野路を静に押し寄せ、一度にドット鬨を揚げたり。敵寄せたりと狼狽するを得たりや應と北條氏康、上杉の陣營に所つて入り立さま横さま蜘蛛手かくなわ十文字に切てまはりしにぞ、上杉勢の討るゝ者は數しれず、凡一万六千餘人は討れ、一万餘人は手を負ひたりとぞ聞こえける。

翌朝十六日北條左衛門大夫綱成は、黄八幡の旗を朝風に靡かせ、城門サツト押し開き、昨夜の敗軍に落膽し兎やせむ角やせむと長詮議に士氣を疲らしたる。上杉勢を散々に驅破りて氏康の居る松山城に入りけり。これを川越の夜軍と稱し當時天下に喧傳せし事なりしとぞ。

海茫茫兮山巖々。崇嶂屹立當其中。飛鳥不度白雲遶。誰樓挿天氣象雄。維昔北條據險隘。虎視八洲傳五代。豐公東征若雷霆。百二山河忽破碎。勿笑兒子豚犬愚。勿笑和議廟算疎。先後敗亡皆一轍。浪華城上啼夜鳥。

(小田原懷古、安積良齋)

氏政には豚犬の誹あり、秀頼にも亦豚犬の譏あり。函嶺の天險も破れたり、浪華の金城も崩されたり。去年は夜鳥小田原に啼き、今年は大坂の天守閣に悲鳴す、先後敗亡皆一轍なり哉。北條氏は狭山に一万石の小諸侯となり、豊臣氏は漸くにして支派の血統に木下の姓を保てり。功名の侍む可からざるは斯くの如し、史を繕きて禾黍離々の感に堪えざるなり噫。氏規は人君として人臣として賞歎す可き人なりき、又黄八幡の子孫聊か北條氏の精神を見るに足れり、惜らくは其絶を断ちし。

第八 (佐野)

●鎮守府將軍藤原秀郷之末葉

○佐野太郎基綱 上野國住人

富綱佐野小太郎 宗綱修理亮

天徳寺了伯 政綱修理大夫 富田左近將監二男

佐野は上野國の名家なり。藤原秀郷の五男文季の子公修その子兼光その子頼行と五世鎮守府將軍たり。頼行の孫に足利大夫成行あり、成行の孫に家綱あり、足利孫太郎と稱せり、この人四男ありき、足利太郎俊綱、山上五郎高綱、足利庄司成俊、同七郎有綱なり。

有綱の嫡子を佐野太郎基綱と云ふ、即ち佐野氏の祖なり。長兄俊綱と云ふは高倉宮御謀叛の時、宇治川を馬にて渡せし、かの足利又太郎忠綱の父なり。平家物語に由れば、「其日の装束には朽葉の綾の直垂に亦草威の鍔着て、高角打ちたる甲の緒をしめ、金作の太刀を佩き、二十四さしたる切符の矢負

ひ、磁藤の弓持ちて連錢草毛なる馬に柏木にみづく打ちたる、金覆輪の鞍置きてぞ乗りたりける。踏踏み張り立ち上り、大音聲をあけて、昔朝敵將門を亡ぼして勸賞蒙りて、名を後代にあげたりし、俵藤太秀郷が十代の後胤、下野國の住人、足利の太郎俊綱が子、又太郎忠綱、生年十七歳に罷りたる」と名乗りて武名を揚げしどあり、かゝる名門なれば、新田足利の南北亂より天正の末に至るまで四隣は更なり四海に尊敬せられたる大名なりき。

宗綱、同國館林の住人長尾照長の爲に彦間の城下に於て、あゝなき最期を爲し、跡には女子のみありて男子なければ相摸の北條の一族を請て宗綱の姫君にあはせむと議定せり。然るに宗綱が弟にて佐野の庄天徳寺に住したる和尙ありけるが、この人のみ常陸の佐竹より世嗣を迎へむと云ひしに、佐野の門葉、大貫越中、竹澤美濃、飯塚兵部等始として宗徒の士一同に連署の起請文を書きて北條に送り、終に氏政の弟左衛門佐氏忠に家を嗣しめたり。天徳寺は大に怒り寺を去つて京都に上りしが、太閤秀吉の小田原攻の時、關東の案内者となり本領に立ち歸り大貫越中守を追討し、富田左近將監の二男を乞ひ請けて佐野の世嗣となし、修理大夫政綱と名乗せしが、後に大久保相摸守忠隣の縁坐により所領を没收せられ佐野城を破却して累代の名家こゝに絶えたり。

まかれども徳川氏の政畧は名門右族の跡を全く絶つことなし、殆んど皆彦間下内に姓氏を保しめたり、故に名家は往々諸侯よりも旗下の中にあり、佐野氏も亦彦間下に其名ありき。

佐野修理亮宗綱

彦間城にて討死の事

修理亮宗綱は佐野の本丸にて、正月元日の祝の雑煮を食ひ居りしに、郎黨一人あわたりしく椽先より御注進とぞ呼はりける。何事ぞと淺黄地に金銀の泥もて花をすりし小袖着て、唐糸の組の帯せし女房達障子を開けば、此處彼處斬り裂れ大童に振り亂し杖にする刀さへ鮮血にすべり、肩より動かす大息つき、宗綱の方を見て、「残念に候ふ昨夜長尾の軍兵に押寄せられ、彦間は落城いたし候」と云ひしのみ、心の弛みしかガツクリと前に倒れぬ。

勇氣勃々たる宗綱はかくと聞くより何かは猶豫せむ、祝の太箸投げ捨て、初春の儀式に床に飾りたる鎧櫃の七五三裏白をかなくりすて、緋威の鎧ザツクと肩に掛け、鎧の上帯結びて端を切り、胃の緒をメめ一ト振ふつて槍を小脇にかいこみ、舍人が牽き出す逸物にまたがるや否や者共來れと云ひ捨て、砂烟を驅立て、唯一騎彦間の城に乗り付けたり。時に維れ天正十三年の正月元旦なれば軍兵は鎧着る

も、太刀佩くも屠蘇の機嫌にチラツク眼元、例よりは諸勢皆な遅しにぞ、馬添粟田某一人のみやうやくにして追ひ付きたり。大膽不敵の修理亮宗綱、敵に奪られし彦間の城の木戸口に馬を立て、ぞ休み居たり。敵は櫓の上より、宗綱を知るやしらすや、彼奴あまりに傍若無人なり射て落せやと雨の如くに、さし詰り引きつめ散々にこそ射たりけれ。

矢一ツ來りて宗綱が射向の板より、脇楯の端まで矢尻白くぞ射透したり。大事の痛手に、剛氣の宗綱も馬より下へドゥと落つ、南無三寶と粟田は駈け寄り、宗綱を馬にかき乗せ、二町ばかりは口取りて引きかへせしが、追來る敵に終に首をぞ取られける。

坂東武者の恒ながら宗綱が雷電的の勇氣は驚歎するにあまりあり。暴と云は、暴なれども英雄の成功には該般の行爲をほし、成敗の跡を以て猥に舌を鼓して評論を試む可からず。

天徳寺了伯

平家琵琶を聴く事

琵琶法師は、軽く轉手を振り、弾きはじめむと爲すをりしも、天徳寺はやと聲をかけて、「今日は極めて哀なる段を聴聞したし」と云ふ、近侍等は、維盛入水か、小原御幸かと耳をすましてひかへしに、

こはそも如何に撥音高く弾き、唱ひ出づるは佐々木高綱が宇治川の先陣なり。

「こゝに平等院の坤、橘の小島夕崎より武者二騎、引懸けく出で來り、一騎は梶原源太長季、一騎は佐々木四郎高綱なり、人目には何とも見えざりけれども、内々先に心をかけたるらん、梶原は佐々木に一反ばかりぞ進みける、佐々木いかに梶原殿、此川は西國一の大河ぞや、腹帯の延びて見え候ふぞ」と唱ひ「其後佐々木鎧陥む張り立ち上り、大音聲をあげて、宇多天皇に九代の後胤、近江の國の住人佐々木の三郎義秀が四男、佐々木四郎高綱、宇治川の先陣ぞや、とぞ名乗ける」と弾きをはれば、勇氣凛々たる曲なるに、天徳寺は雨粟とぞ泣きにける。しばらくあつて天徳寺はまたも所望し、

「あはれなるをば亦一曲弾れよ」と云へば、法師は又も勇ましき那須與一が扇の的と與一目を垂て、南無八幡大菩薩、別しては我國の神明、日光の権現、宇都の宮、那須のゆせん大明神、願はあの扇の真中射させて給はせたまへ、是を射損ずるものならば、弓切り折り自害して、人に再面を向ふ可からずと談りつゝくれば、天徳寺は亦もや落涙敷行に及び衣の袖は絞るばかりに見えにけり。

近臣は主君天徳寺の感涙の意を覺す、何故に、あの勇しき段を聴せられ、御涙に咽ばせ給ふやと、云ひければ天徳寺は打ち驚き、「今日までは、各自を武士と思ひしに、聴けば淺間敷心根かな、佐々木高綱も那須の與一も必死を極めし、眞の武士の心意、さればこそ與一は神佛に祈誓をこらし、もし仕損

ぜむには馬上にて腹掻き切り海に入らむの覚悟なり、又、高綱は誰にも賜らぬ生喰を、頼朝公より賜りしに先陣を人にこされて、再び顔は逢されまじ、もし梶原に先を駆けられれば、木曾の陣中に入り切死は覚悟せしならめ、思へば弓箭の道ほどあはれなるものはあらざる可し、我はこの人々の心意を以て戦場に出づる故、思ひやりては落涙に堪えざるなり」と、語りしとかや。

關東には那須、佐野、佐竹の諸名族ありき。那須は御堂關白道長公の裔なり、佐竹は新羅三郎義光の末なり、ともに後世の武人が藤原、源の二姓を冒すが如きとにあらす。兩家ともに嫡々の正統を嗣ぎしなり、故に宗綱の陣没するや、天徳寺は衆議を排して嗣子を佐竹より乞はむと欲せしならむ、佐野は藤原秀郷の裔、佐竹は新羅三郎源義光の正統なれば、佐野の家を嗣ぐに恥ぢずと思ひしならめ。然るに宗族老臣等は北條氏の勢威を畏敬し、終に伊勢新九郎長氏の末孫氏政の弟氏忠を迎ふるに決せり、憤然として、天徳寺が一簣一笠飄々乎として白雲郷に身をまかし、高逸の風采慕ふ可きに非ずや。抑々武人の骨法にも鎌倉武士あり、室町武士あり、貧富榮辱生死を問はず家系を重むじ、節義を尊とみしは鎌倉の眞相なり、之に反して貧富に縛せられ、利名に汲々たるは室町士人の氣象なり、天徳寺の如きは未だ鎌倉武士の餘韻を存じたるか、彼は平語を聽て佐々木と那須與一の爲に涙を流し、ものな

り、形は圓頂細衣の人なれども、心は太刀佩き弓執りて朝敵を征する古代の武人と云ひつ可きなり、然れども關東武士は何んぞ九州武士に其智の劣れるや、那須亡び、北條破れ、佐竹削られ、相馬殘喘を保ち、佐野も滅びぬ。かの島津、立花、鍋島、大村、五島、松浦等が甚しき削小を見ずして、今日に至れるが如き智なかりき、はた是を鎌倉武士の骨法と稱す可きか、非か。

第九 松前

● 清和天皇皇子貞純親王子鎮守府將軍經基五代源義光裔

○ 光廣 蠣崎氏 — 慶廣 松前伊豆守 — 盛廣 若狹守

崇廣 — 子爵 松前脩廣 (松前種)

小笠原貞頼、朝鮮の役に南海を回歴し、無人島を發見す、名づけて小笠原島と云ふ。徳川吉宗の代に貞頼の末孫同苗貞行あり、官に請ひて祖先の發見せし孤島に航し方物を取りて歸る。文久年間幕府吏を遣りて島地を開拓せむと欲す、この時既に英國人あり來り住す、吏この島の我が版圖たることを告ぐ、それより海外諸州の人も皆な南海の無人島は我が版圖に屬せしものたることを曉にしたり。豊公は鷄林を震動し大明を威嚇せしと雖も、尺地寸土も我が版圖に屬せしめしものなし。然るに貞頼が發見せし無人島は、鼉爾たる彈丸黒子の孤島なりと雖も、咖啡耕す可し、甘蔗作る可し、バナナ、椰樹等の熱帯植物を培養して、豊原の中津國とは南洋も包括するの感あらしむ。其の功や大かつ偉

なりと云ふ可きなり。

更にこの功業に倍する千百なるものあり、何ぞ。實に松前氏の祖先蠣崎光廣が爲し、事とす。彼は貞頼の如く一孤島を發見せしに非ず、蝦夷と云ふ一大島を占領し北門の鎖鑰を守りしなり、人若し北海道に開明的の社會を創設し、始めて文化的の政治を布きし者を誰ぞと問はば松前氏の祖先と答へざるを得ず。文化の初に露國の使節レザノツフ長崎に來りて和親を請ひ。幕府の拒絶に逢ひ歸路蝦夷に寇せしと雖も、松前氏と云ふ藩鎮あり大に人意を強ふせしめたり。サガレン島は終に千島と交換せられたりと雖も、沃野千里、寶山重疊の東蝦夷は北海道となりぬ。鮭、昆布、海獺、は海にあり、麥、豆、甜菜、は野にあり、風光時季は人をして轉た北米に在るの感あらしむ。寒帯の動植物は千島群島を探りて得べし、又鹿児島津大和國とは北氷洋をも覆へるの思あらしむ。

松前氏は足利の代に若狹を離れ、沿岸は怒濤、雪浪を蹴へし、山野にはアイノが毒箭を擲へ、シヤムを見れば放たむと欲する時に、故國を去りて渡島に移りしなり。松前氏は新羅三郎義光の裔にして甲斐の武田と同流の源家、元より商賈流民の衣食を追ひて、かの明の沿岸に出沒せしと同日に語る可からざるなり。吾人は小笠原貞頼の美學を賞する時は、必ず相ひ伴なふて松前光廣が偉業を歎賞せざるばあらず。

松前氏の如きは中原の戯場に立ちし且にも非ず、丑にも非ず。風雪を慕とし波濤を鼓とし、一番の脚色を津輕海峡の北に演ぜしものなり。

文化四年丁卯、志摩守章廣の代に奥州梁川に領知を移されしが、再び舊領松前に復したり。徳川氏の武鑑には無高居城松前蝦夷一圓とあり、もしこの蝦夷を拓植せられしものと見る時は諸侯には非ず、南面して朕と稱する小國の君主と云ふ可きなり。幕府に時獻上の品を見れば熊皮、鹽麩、鱈、昆布、臘肚臍、あり物産の豊富なるは既に世の認識し所なりき、封建の世は何むぞ國利を計るに鈍きや。日本橋頭に獻殘屋と號する老舗ありて、諸侯の土物を贈りし家の殘品を賣り聊か都人士が好奇の念を満せしのみ。松前氏は代々伊豆守、志摩守、若狹守を受爵の名となせり。

松前光廣

小石を噛みし事

蝦崎光廣は渡島に來り、近傍をながむれば春とは云へど花もなし。たゞ皚々たる銀世界、雪間の野邊には黄金の色の福壽草の咲き匂ひたるが、恰も黄なる毛氈を敷きたる如し。

若狹より携へて、定紋つけたる大幕引きわたし、黒木のまゝの家なれば、たゞ寒からぬ準備のみ、陣門には雪覆ひして晝も暗し。今日はオツテナ(酋長)の來ると云ふにぞ、光廣は心に一策を案じ出し、家人を呼びて驅きたり。廣々たる板間には唐船の齎したる、燃るばかりの紅の毛氈を敷きつめ、上段には紫縮緬の帳幕を絞り、四壁には弓矢鎗長刀を並べ置き、光廣は緋威の鎧に赤地錦の陣羽織、黄金作りの太刀を佩き搦烏帽子を戴き、虎の皮の敷皮しき、左右には郎黨あまた整々と居並びぬ。思ひくの装は卯花あり、紺糸あり、黒草あり、絨毛麗しくしてひかえたり。

案内にひかれて、渡島のツツテナ。従がふアイヌは七八人、身の丈は六尺有餘の大男。肩幅廣く張り、面部丸く鬚蓬々と荒れたるが、身にはアツシを着しケリを穿きしまゝ(鹿皮毛着の履)ノツサ々々ど入り來たりしが、この廣間の躰裁に驚きしか覺えずも跪ぎたり。光廣は得たりと心中に微笑て、上段より聲高く、「コリヤ、オツテナ、我はコタンカラカムイ(造物者)の仰によりアツイバア(海の東)より來りしなり、以後マドマヒ(頭目)は申すに及ばず、マスキシヤフヤ(石狩地方)に至るまで、余が遊獵の地となさむと思ふなり、若し手向等致すに於ては許さぬぞ」と、鷲の羽翼のす猛威もて叱るが如くに命令したり。熊には敗ぬ酋長も未だ嘗て見ざりし蝦崎が最後の威嚴には、ハット驚き震ひ、「私はマドマヒのオ

ツテナに候へども、之より北にはマスキシフヤのオツテナの候へば、私の自由にはなり難く候、然りながらマドマロの地は、如何なる獸も只御意のままに遊ばされよ」と、答へたり。

光廣は面を和げ、「いしくも答へたり、余も満足に存ずるぞ、爾等がコロボツクル(侏儒)を滅ぼせし如くには、我は爾等を獵に殺すことは爲さじ、ソレ侍どもオツテナを饗應」と云へば、兼て計りし献立は黒豆の煮たるに鹿の肉をば炙しなり、酒は若狹の丹醪なり、やがて光廣盃を手にとりあげ呑み干して、酋長に與ふれば、オツテナは先づ盃が珍らしく朱塗の大杯に金泥もて鶴を畫がきし物ゆゑ、手にもつさへも嬉しき有様なり。なみくど配がせし酒に舌を打ち、黒豆を指にてはさみ喰むと爲せども堅きと石の如し、よく見ればいかに小石なり。ふと光廣の方を見れば、同じ石の黒豆をば、さも甘味さうに喰ひたり。こゝに至りて酋長は心より信服したり。石さへも噛み碎きて食す所の人なれば、これぞ眞のカムイ(神)なり、キムンカムイ(熊)も及ばじと、其日よりして全く光廣の命には叛かざりしと云や。

こは光廣が計畧にして、酋長の膳には小石を椀に盛り、己の膳には黒豆を入れ置きしなりとぞ。當時の事は今日の人の信ずると能はざる所なり、たゞ南洋諸島の蠻人に接しなば思半に過るあるのみならむか。

紅梅の生花の事

元祿年中京都町奉行を勤めし、松前伊豆守は、かの所司代板倉勝重父子に續きて、治政の譽高き人なりき。或日、政務の餘暇に紅梅のよく開きたるをば、自ら古銅の瓶に入れてながめ居たり。をりしも海保友竹といふ畫師の参り、床の前に手をつきて、暫時く見てありしが、伊豆守の方に向き、「鶴の聲も未だうけたまはらぬに、さすかは御役柄に入せられ候、御所司代か、御町奉行の此方様にこれなくては、かゝる初花は見るとは叶ひ難く候と云ふ。伊豆守は何思ひけむ、とかくの返答もなく頓に落涙せられたり。友竹は悪しきことを云ひたり、何事が伊豆守の心にさはりしかと、友竹も亦た默然と手をつきしまゝ坐し居たり。

伊豆守は、やゝありて「友竹老よくも云れたり、誠に左様なる可し、紅梅の初花は未だ洛中洛外に見ることあるまじ、我等不肖の身なれども、重き役義の仰を蒙りたればこそ、威勢ありて斯る初花をも手に入れられしなり、うかくと心付ずして油断せば大なる役義の上に過失あらむ、大事の役と存じて氣遣はしく落涙を致せしなり」といはれしかば、友竹も假初の一言にもかくまで心を付らるゝかと思ひては、これも亦た豆州の心をくみて感涙を流し、とぞ。君子敬畏の道は豆州の一言にあり。此人の仁政は京都にながく云ひ傳へたりと云や。

第十大村

●大織冠鎌足公之後胤

○直澄 一後院御宇始賜三肥前國藤津彼村、高來三郡二而住于大村一

純忠 有馬修理大夫晴純入道仙岩二男

喜前丹後守
新八郎

純頼

純信

伯爵大村純雄

(大村藩)

丹後守喜前

下の關より歸りし事

長門の國下の關には兵船影しく泊りたり。右には有馬大村、左には松浦五島の暮うちて夕風に船印をなびかせたり。

大村喜前の船の中には有馬、松浦の人々ぞ寄り合ひけり。年長なり門地なり有馬こそ口を開かむと松浦五島はひかへしが、大村喜前はこらへかねて進み出で、石田、小西の面々が牒狀によれば秀頼公の仰せとあれども、熟々事の跡を案ずれば全く石田、小西輩が宿怨ありて徳川家康を始とし福島、淺野、細川等の七人を討むと欲する私心なり、喜前七年の間、小西攝津守と朝鮮にあり、行長が人と爲りとは熟知いたせり、彼は勇あれども大勇ならず、智あれども大智ならず、徳川家康に敵する者に候はず、その小西輩と事をとるにす石田なれば野心あるは必らず一定に候と、若年なれども純忠の男なれば天下の大勢をば観破したり。

有馬、松浦、五島の人々も、大坂方の催促に應じて國を出しとなれば、喜前の言を聞き、まばらくはたし啞然としてありけるが、喜前は一座の同意せざると見るや、丹後守は御同道は御免と云ひはなち、式代して己の船に歸りたり。間もなく漕ぎ出す櫓の音高く大村の兵船は玄海灘へと駛りゆきぬ。有馬、松浦等の人々は、マゝあれくと叫びしが、斷然大坂方に背きて、數十艘の大村舟の港より出るを見、こゝに初て意や附きけむ、丹後守に同心せよと互に先を争ひて、今まで泊りし九州船は一ツも残らず漕ぎ去りたり。

大村喜前は本國に下るや否や、熊本の加藤清正に牒狀し、人數を送り他の諸侯より先じて徳川方の諸

侯と名乗りぬ。

當時、九州には秀吉の餘威未だ衰へず、况はんや五大老には安藝の毛利中納言輝元、備前の浮田中納言秀家あり。會津の上杉中納言景勝あり、島津も加増したり、皮相より窺へば日本全國鼓を鳴して徳川家康を征討せむと爲すが如し。この時に當り決然として丹後守喜前が立て關東と呼應し、清正を助けしは喜前が九州を鎮めしものと云ふも不可なし。機を觀るに敏なるは兵家の重むる所なり。また一家の興廢に關すると大なり。

丹後守純信

熊野某に小松を與へし事

切支丹宗は足利の末より、織田信長の代に及び、日本國中津々浦々に、サンタ、マリヤの御影のあらざる所はなかりき、後に秀吉の怒に觸れ、家康が儒佛を崇奉するに及び、信徒は苛刻の刑戮に堪へしと雖も、社會の潮流は外教を國外に排せむとして止せりき。

九州大名には、其初より信徒多く、別けて大友の如きは無二の信者なりき。一時は諸侯として奉信せざる者もなく士民として崇尊せざるはなき有様なりき。

世は元和偃武の後に及び、ますく鎖國保守に傾きぬ。徳川家光の代に至りて、いよく切支丹の禁制嚴重にして草を分けても探りて跡を断たむと爲すの勢あり。加ふるに大坂落城の後は豊臣方の遺臣と結託するの色ありければ、さなきだに社會の逆流に沈みたる切支丹なり嘗て信仰せし九州大名は徳川氏の嫌忌を避け藩臣にも教を捨てさせ、たゞ家運の長久を願はぬはなかりき。

大村氏も亦た其一人なれば、意を配りて外教に關係せずしてありけるが、俄然幕府より令して曰く、切支丹、波天連を信する者あらば追捕す可し、若し領主にて怠慢の所置あらば、急度御答ある可し、とあり。然すども嫌忌の中に日を送りたる純信なれば、老臣熊野某を呼び出し、「汝、我が家の爲に、切支丹宗門の者を十分に吟味せよ、領内は申すに及ばず、長崎港は特に大切なり、近くは島原亂の殘黨も所在に埋伏なす時なれば、よつと信者を取り調べよ」と命じたり。

忠臣熊野某は、大村家の一大事なり、また切支丹の邪宗門は我が好まぬ所なり、腕の限り根氣のかきり探らむと、彼杵郡は論をまたず、長崎の近傍は力を極めて男女老若を問はず、片ツ端より捕へたり、この迫害は近國近郷に響きわたり、はや幕府へも聞えしぞ、大村家の風評頗る善し。

純信は欣喜に堪へず、今日は老臣熊野某が歸國と大きくより、近臣召し具し歸帆を待たむと、或浦回に幕引せて待ち構へたり。

磯打つ浪も静にて、風にもまれし黒松も蟠れる龍の如く大村の家運繁榮を祝ふに似たり。沖の方より漕ぎ来る船は櫓拍子面白く、船歌勇しく歸り來りぬ。純信は船より老臣熊野の上るを見より、「此處へ此處へ」と、うちまねき、「汝の手柄にて大村の家は盤石となりぬ、善く爲しぞ、丹後守満足に存ず」と、君主の厚き言葉に、熊野某は背に汗して畏伏み居たり。

純信は、四邊を見つゝ、胡床の傍の小松を引き、手に持ちし軍扇の背紅に日を畫きたる上に載せ、「當座の褒美ぞ、純信の志を受よ」と云ふに、熊野は君恩身にあまり眞砂に伏して言なし。

宗教迫害の事案より恐なりと雖も、當時の形勢にはまぬかれ難きとなるか、熊野氏の君家の爲に力を盡すよし、純信が祿を以ても賞するにあまりあるを以て、千歳の鶴も眞くふと云ふ小松を與へて老臣を賞す、未だ全く腥風血雨の晴れざる日に、この優美なる舉動ある、是も亦た可し。ともに太平の象と云はむのみ。

大村氏は藤原純友の裔なりと云ふ、純字を以て名乗るは其末なるが爲なり。有馬氏も亦た純友の裔なりと云ふ説あり、然れども今日有馬氏の系譜を問へば藤原氏に非ず、源姓にして赤松則村の末孫なり

と聞く、純友の裔は唯だ大村氏あるのみか。

平將門、藤原純友二人は天慶年間の朝敵なり、將門は下總に起りて親王と自稱し、純友は伊豫の近海に出没して官物を奪掠す、其擧頗る恐む可しと雖も、暴横かくの如きに到らしめしは藤原氏の驕僭に激して、この逆意を發せしめしと云ふ可き所あはし。人と云ふ物皆な温良恭謙ならむには恕す可き道に非ずと雖も、悲哉、争鬪妬忌の情熱に動さるるは普通の人の常情なり。將門純友の如きや、上流の地位に生れて、顯榮發達の道を閉塞せられたり。白雲郷裡に悠々自適する理想なくむば、豈に憾軻鬱勃の中に光陰を送りて満足するを得むやもし相家藤原氏に激してより、この暴擧を爲したると思はし、將門純友も其情はあはれむ可し。東に將門の裔相馬氏あり。西に純友の末葉大村氏あるは皇天も其情をわはれむで恕し、ものか。

大村氏は宗祖直澄に一條院が肥前國藤津、彼杵、高來三郡を賜しより家運の浮沈隆替は免れざりしと雖も大村に住して千有余年間家聲を地に墜さしりしは稀有なる諸侯と云ふ可きなり。徳川の世には二万七千九百七十石餘の領知と稱せしと雖も、細尺を以て與へし所領に非ざれば、其實中藩に置く可き力ありたりと聞く。明治初年の王事に盡せし所を見れば實に中藩の餘裕ありしと云ふ可し。

第十一 (筒井)

英雄には種姓なし。足利の末葉に及び、頭角を戦亂の暗雲より聳せしは、源平藤橘四姓の正統に非ず、油を賣りし齋藤道三、武者修行の明智光秀、桶屋の子福島左衛門大夫正則、頼朝の木像を擲きて大笑せし土民の子息の太閤秀吉あり。實に諸侯の祖先には藥商、船頭、行商、野伏、百姓ありき。筒井の祖先亦た南都興福寺に屬したる坊官の如き家なり、星移り物變り數十世の後に至りて家勢をささ諸侯の如く、終に和州一圓を伐り從へ、猛威近畿を震動したり。中興の祖と仰ぐ可きは榮舜坊順昭なり、順昭の子に順政あり、順政の子に雄名を轟かしたる大和國守護筒井陽舜坊順慶あり、其子に至りて全くの武人となり筒井伊賀守藤原定次と云ふ。秀吉關白になりし時、定次も侍從に任じ伊賀國十二万石を領したり、鎮西、關東、朝鮮の役に從がひ、關ヶ原には徳川家康の味方となり、徳川無二の諸侯なりしが家臣中坊飛騨守秀祐が爲に訴へられ領國を沒收せられ家絶たり。後に順慶の猶子主殿介某あり、四万石を與へられしが、大坂の亂に不覺なる振舞あり、家康秀忠の怒に觸れ自殺して失たりとぞ。

筒井順慶の事を考ふるに、生年六歳にて父順政を失なひ、國人叛きて、かの老將松永彈正久秀に從ふ者多し。久秀の勢威日夜に増し終に大和河内の堺なる志貴山に城き、多門城を奪ひ和州一圓を併吞せむとせり。順慶年長じて天龜二年八月和州辰市の戦に松永を破り、首を斬ること五百級手負數を知ず、久秀の勢威之より衰へたり、順慶はやくも織田上總介信長の人と爲りを知り、款を通じて松永久秀、三好義繼を討しが松永の織田に降りし後は和州まばらく干戈の争ひを斷ちたり。天正五年八月松永久秀信貴城に籠りて信長に叛せり、順慶坊は織田城介信忠に從がひ志貴城を破り、和州一圓再び筒井の領する所となりぬ。明智光秀の亂あり順慶頗る狐疑二心の誹謗ありしが、和州に於ては素より豪族なり、秀吉も意に満ざりしと雖も本領は安堵せしめたりき。順慶は歳六十六にて死し、四郎定次家を嗣ぎしなり。

陽舜坊順慶

志貴城を破りし事

長袴の裾長く踏みしたぎ、白綾の無垢小袖、威嚴物作りの大太刀兒小姓に持せ、白髪の鬘緊と結び

胸に疊みし奇變術數、十月十日の曉に書院の上段に坐し屢次殘燈の暗きをかゝげ諸手の注進を聞き居たり。

をりしもパツト障子に映ずる火影は旭日に非ず、まさしく城中より火を失せしなり。久秀は突と立ち上り、大音聲に、「誰かある火を出せしぞ、敵は近く攻寄しに、はやく消し止めよ一大事なるぞ」と呼はりたり。スワ大事と城中は恰も鼎の沸くが如し。されども松永彈正が多年の間指揮せし侍なれば、持場々々に油断なく兵士を配り、又一方には火の手にかゝり大團扇、龍吐水、懸け矢、窩口、手にく提げ一軒の武器庫を消し止めたり。やうやくにして武器庫を消し止めしと思へば、又もや發る猛火の光り兵糧庫より燃え出せり。かくては叶はじと、諸手の侍大將は身をもがきて指圖せり。危哉火先は十丈の龍の舌を吐くに似て硝硝藏を嘗むると見へしが、轟然天地を突ん裂く響して火焰は満天を焦し黒烟の中に志貴山は没したり。時しも聞ゆる貝鐘大鼓曳々と麓より押し上げ來る織田と筒井の大軍、烟をくもりて大手の門を打ち破りぬ。

此時松永彈正久秀は甲冑に身を堅め、此處を大事と防禦に力を盡し居りしが、こは如何に大坂の石山門徒より加勢に來りし二千人の軍兵は、得物を取りて呐喊し松永の勢を斬り伏せく、攻め上る筒井勢をば城門開きて引き入れたり。かくと見るより彈正久秀は赫然として面色血走り、「還俗大名の筒

井に賣れたるぞ、大坂へ加勢を請ひに還りし侍は、もと筒井に仕へし者なれど、不忠の者とは思はざりしに、正しく連れ來りしは筒井の勢と覺えたり、殘念なり」と叫びたり。はや亂れ入る敵の大軍、はや燃えかゝる紅蓮の火、建て連ねたる陣營は猛火に映じて地獄の相を見るに似たり。噫、松永久秀は、奸惡無道の人なりと雖も其末路を見れば轉た哀憐の情なきにもあらず。この石山本願寺の援兵と云へるは全く筒井順慶の計畧に出でしなり。志貴城に己が召し仕ひたる侍のあることを思ひ出で、其侍に反忠を勸たり。不幸にして久秀が其侍を石山へ援兵を乞ふ使に遣りしかば大に喜び順慶に計りて筒井の兵二千人を援兵と偽りて城中へ入れ、其軍兵が火を放しなりしとぞ。

洞ヶ峠の筒井勢の事

武田は滅び、上杉は死に、毛利も今は降るならむ、備中高松は水浸し、羽柴筑前守秀吉に攻られて輝元も隆景も元春も狼狽せりと云ふ風説なり。右府信長公の御威勢天下に齒向ふ者はなしと、人も云ひ吾も信ぜしに、六月二日の朝より五畿内は恰も天地の崩るゝ如く、人みな本能寺の大變に色蒼然めて高話さへ爲すものなし。

筒井順慶はかねてより明智光秀とは、連歌、茶道、の友なり、また武道の師と仰ぎしとなれば、六月

四日に自は和州大安寺、辰市、東九條、法花寺の邊に陣取り、井戸某に軍兵を引き分けて、光秀の加勢を爲したり。明智は將軍職に任せしと云ひ、京都の地子銭許して人望は非常に好しと云ひ、あはや、天下は惟任將軍光秀の掌握に歸するならむと思はれたり。

日數五六を重ねる中に、形勢は早やくも一變し、猿面郎秀吉は木傳ふ獲の營にもれず毛利と和睦して大軍尼ヶ崎に集まりたり。また三七信孝殿は織田信澄を誅し、丹羽五郎左衛門尉と共に攻め上らるゝと云ふ噂あり。明智には織田の舊臣も諸國の武士も同心する者なしと云へり。筒井は例の慣手段すは一大事と井戸某に命じて軍勢を引き返らしめ、腹臣の島左近を使として、一紙の起證文を書き裏切りせむと、秀吉に云ひ送りぬ。

光秀の使者藤田傳吉には返事も爲さず、十四日に先陣をば洞ヶ峠に打ち立たせ己れは遅れて十五日に馬を進め、山崎の戦をはりし時に、やうやくにして京に入りたり。當時京童が「日和見の筒井殿」と云ひ囃せしは此事なり。

順慶は智餘りありて頗る義氣に乏しと云はざるを得ず。

順慶の小姓牧村兵太の事

池田信輝は、明智日向守を討たむと計りしが、もし大和の筒井順慶の加勢ありては事難儀なりと考へ、先づ使者を遣らむと思ひ、股脇の侍、日置猪左衛門、土倉四郎兵衛、丹羽山城の三人をば、使者に命じたり。三人は承まはり、順慶もし日向守に一味いたし候ば、猪左衛門、四郎兵衛、山城は命を捨て、其座を去らず、刺殺し申す可く候と答ふ。信輝は眉を認め、「否、其方達に死なれては、信輝は片手を切られたるに同じ、日向守に順慶が同意せしとて、ゆめく手荒の振舞ひを爲すと勿れ」と戒むれば、また三人の答ふる様、「仰を返すは恐れ入りたる事ながら、もし順慶が光秀の味方と相成り候ふときは、御家の侍あまた討死仕り候はむ。三人の命を以て數百の人命にかへ候ば、光秀奴はたしかに敗軍は鏡にかけて明に候」と、答へ死を決して信輝の前を退きたり。

やがて三人は筒井の陣にゆき、對面を請ひ、順慶の前に出でたり。思ひきや順慶は頗る慷慨の氣色にて、右府信長公の御爲に、吊合戦を致す可しと云ふにぞ、三人は案に相違し、喜色面貌にあらはれて筒井の陣を立去りたり。途中丹羽山城の云へる様、「今日もし順慶が光秀と同心の色あらば、飛びかゝりて刺し殺さむと思ひしが、不圖順慶の傍に順慶の刀を持ちてひかへ居たる小姓あり、未だ十六七

歳に見へけるが、眼中の色たゞ者ならず、もし我等が順慶に飛び掛らば、あの小童に頭を二ツに切り割られむと思ひたり、恐ろしき少年かな」と話したり。日置も土倉も同音に我等も同じく、あの少年の眼色をたゞならず覺えたり」とぞ語りける。その見小姓は牧村兵太と云へる剛の者なりしとかや。昔時、魏の曹操劍を捉りて匈奴の使者に對せし時、一見して匈奴の使者が、阿瞞の英雄なることを知りしとぞ。人固より知り易からずと雖も、英雄はまた英雄を知るに難からざるなり。この兵太を小姓とし、石田三成が佐和山三十万石の半を分ちて客臣と爲せし島左近も順慶の臣なりき、和州に武名を顯し終に諸侯となりし松倉彌七郎も亦た家人なりき、順慶は凡庸の將にあらす。

敏山、三井、根來、石山には惡僧あまたありしと雖も、緇衣方袍の徒にして諸侯となり大國を領せし者はあらずりき、獨、和州の筒井順慶坊あるのみ。

順慶素より緇流の家に非ず、父順昭の代に既に大和を伐り從がへしなり、然れども崛起して武門の將士と弓矢を争ひ、門下に豪傑を集め、松永を攻めて侵地を回復し、明智と秀吉の間に立ちて順慶が方寸に天下の安危を繫ぎしは、彼も亦た一個の英雄なり。宜なる哉、島、松倉を願使し、連歌、茗蕪の間に縦横の策を盡す、山水明媚の寧樂に人と成りし者に非ざるなり。不幸にして其子定次あり、驕惰終に家臣中坊の爲に訴へられて家断絶せり。

筒井氏の傳を讀みて、一ツは順慶の爲に悲しみ、一ツは順慶も其中の人たるを憐れむなり。何をか悲しみ、何をか憐れむ、當時和州の土風の柔惰にして貞節なきことなり、順慶の幼時には松永久秀に阿諛志、順慶も亦た本能寺の後、光秀の威強ければ之を助け、すこしく傾むく勢あれば秀吉に款を通ず、款を通ずれば猶狐疑して進まず。定次關ヶ原の役に關東にありて家康に從がふ、大坂方より和州に攻寄せれば留守の家臣等城を開ひて敵に抗せず。主殿介某は家康の恩惠により筒井の家を嗣ぎしに元和の役、大坂勢の猛威に恐れて城を守ること能はず、山中に遁逃す。噫、和州の士氣は戰國に於てさへ斯くの如く萎靡せしは風光の和煦なるが爲か、はた京洛に近きが爲か、百載の下筒井の爲にあはれむなり。

第十二 奥平

●村上天皇皇子具平親王十二代

赤松太郎則景二男兒玉左衛門尉氏行末孫

參河國住人奥平美作守貞能男

○源信昌 三州長篠城主

奥平九八郎受領美作守

家昌 大膳大夫

母德川家康長女龜姫

忠昌

伯備奥平九八郎(中津藩)

奥平美作守貞能 同 九八郎信昌

奥平父子德川家康に歸降の事

甲斐の武田に屬せし人々は、此處に集り彼處に寄り人心恟々として穩ならず。寄れば必ず府中の囁

武田晴信入道は死せりと云ひ、否なく昨日も今日も諸國の使者に對面せりと云ひ、風評さまざまにして確實なる事更になし。

奥平美作守貞能は然なくとも兼てより德川家康に心を通じ歸參の心強ければ、武田の領地に發りし事は大小となく密告せり。こゝに武田の一門に同苗左馬介と云ふ人あり、をりしも黒瀬に陣取り居たり。頃日の奥平の舉動たしかにニタ心ありと覺えしにぞ、或日使者を遣りて貞能をば己の陣營に招きたり。貞能はさりげなく尋常に裝束して武田左馬介の招に應じて對面しけり。

「如何に奥平殿、和殿は德川家康に心を寄するとの風説あり、然るに今日の見參こそ神妙に存するなれと云ふ。怯弱の人ならば驚く色の顔に顯るものなれど、貞能は老功の武者なれば、少しも騒ぐ姿なく、これはく武田殿、思もかけぬとを承はりて候、この程は府中より村落に至るまで、様々の風評多く、父は子を疑ひ、子は又父を疑ふ有様なれば、貞能の事も必竟讒者の申す條と存じ候、決して信するに足らず」と答へ、悠然として敷皮に坐し、猪狩、兎獵、小鷹狩の面白き話を移しける。貞能は素より家康の爲に一命を献げて忠を盡さむと覺悟を定めしとなれども、笑中に刃をかくす、今日の響應はいかに心苦しくやありけむかし。

やがて貞能は喉を乞ひ歸むと爲し、に、武田左馬介は、ヤ、と押し止め、「はや日も暮るに近し、道遠け

れば春とはいへど風まだ寒し、酒一ッ参らせむ」といふふ。貞能は一咳して「何氣なき色をつくり、虎穴に坐する思はあれども、また立ち戻り、かねてより御支度に候はし、御酒賜はりて歸る可し、さらば後日に頂戴に罷り出でむ」と應へたり。主人左馬介は愈々安堵し、郎黨をかへりみて、「御酒はやく持て」と命じ、それより夜更るまで數献の盃を重ね、小謠おもしろく唱つ、歸たり。左馬介は貞能を見送りて坐に歸り、奥平美作が今日の振舞を見れば、よも二ッ心はあるまじと安堵せり。

虎の尾を踏み焼々たる、貞能は城に歸るや否や、子息九八郎信昌を呼び、今夜を延すなど郎黨家人を呼び集め、宮島、瀧山に要害を構へて立籠りぬ。

この時、九八郎信昌は最愛の妻を、武田勝頼の許に質として送りしをも見捨て、父子同じく徳川に歸せしかば、長篠戦争の後に家康の息女龜姫をば信昌の妻と爲したり。

長篠戦争の事

「武士の矢なみつくらふ小手の上に霰たばしる那須の篠原」鎌倉右大臣の和歌の意をあらはして、曹にも甲にもたばしるは矢玉の霰なり。天は五月雨に掻き曇りて暗く、地は潦水を池の如くに湛たり。

九八郎信昌は城中を見廻り、今暫時せば、徳川殿にも織田殿にも後卷きのあらむぞ、辛防せよ。爾の勳功は九八郎が身に引き受けて空しくなまじ」と慰勞めたり。櫓に上りて見わたせば大野川は渺茫と漲がり、武田の軍勢は野にも山にも充満て蟻の入る可き透間もなし。山縣、馬場、奥田、穴山、仁科の旗印風に飄へりて凜然たり。

勝頼の代とは爲りたれども、信玄の引き廻したる軍兵なり。孫吳の蘇生して自ら三軍を率るとも是に過ぎじと覺えたり。侍大將は信昌と面を見合せ、「若殿よ、城中には最早二日の兵糧なし、鳥居強右衛門と鈴木金七郎の兩人は首尾よく敵陣をくぐりぬけたりとは、合圖の狼烟にて合點いたし候へども、只今に至るまで後卷の合圖はなし」と、嗟嘆せり。をりしもカンボウが嶺より、一道の狼烟天を焦して現れたり。かねて鳥居と約せしは後卷あらば三度狼烟をあげよ、後卷のあらずば二度狼烟をあげよ、二度の合圖あらば死を決せむと云ひたれば、奥平主従はアレヨ、アレヨと叫び打ち上ぐる狼烟を算ふれば、嬉しや三度翻翻と立ち昇りぬ。鰍魚の水か、盲龜の浮木、餓えて死なむと爲し、長篠城は忽ち春の來りしに似たり。

無双の忠臣鳥居強右衛門は、相圖の狼烟は既に上げたり。城中にては安心せしならむ、いで此の上は

再び水をくいて城中に入り、徳川殿織田殿の御出馬の様子を詳細く語らむと大膽にも唯一人、大野川の川端に水面をばながめて立ちたり。武田方にては、兼てよりかゝるともあらむと思ひ居たれば、柵を結び白砂をまき、出入の足跡をさへ改めたり。穴山梅雪の手の者は足跡傳ひて、今や川中へ躍り入らむと爲る、鳥居強右衛門の背後より捕たと云ひて押へたり。多勢なれば詮方なく強右衛門は縛められ大將勝頼の前に引き出だされたり。されども強右衛門は泰然として問はるゝまゝに答へたり。勝頼は強右衛門の勇武を愛し、もし我が命に従がひ、堀際に立ち城中の者に「織田殿は國中に謀叛人ありて中々に援兵を爲すこと能はず、徳川殿も織田殿すでに斯くの如くなれば、武田に向ふ勇氣なし、早く城を開ひて降参あるこそ上策なれ」と云ふならば、命を助け知行を興へむ、もし我が命に背かむには磔刑に上げむ、如何にや如何にと問ひければ、強右衛門は大口開ひて打ち笑ひ、「命を助け知行を興へむ」と宣給ふを、誰かは違背を仕らむ、仰の如くに城中の者どもへ、申さむ」と答へしにぞ、やがて武田の兵士等は鳥居強右衛門の左右を圍み堀端近く立たせたり。

「城中の人々に物申さむ」と聞えしにぞ、奥平九八郎は櫓の窓より見下せば、無慘なり、鳥居強右衛門は捕はれたり。強右衛門は信昌の姿を見るより大音聲に「織田殿には國中に謀叛人あり、徳川殿には援兵思もよらず早く降参せらる可し。かく云ふならば命を助け知行を興へむと勝頼様の仰なり。然

りながら鳥居強右衛門の口状は、織田殿には早や岡崎に來給ひたり、先陣は一の宮に在り、徳川殿御父子には野田まで御馬を出されたり、此城の運開かむは掌の中に在り」と云ひしにぞ、此奴不敵の振舞と武田の兵士は取つて押へ、大將勝頼の前に牽きすえたり。かくと聞くより勝頼は跳り上りて、ハツタと強右衛門を蹴倒したり。鳥居は傲然として冷笑ひ、前の口上が殿の仰なり、後の口上は奥平九八郎信昌の家人鳥居強右衛門の分にて候、なにを左様に怒らせ給ふと、空囃ふひて坐し居たり、勝頼は益々怒に堪へかね、つひに磔刑にぞ上にける。

長篠の戦に大敗軍を爲し、より、武田の家運は終に西山の日影となり勝頼が天目山の朝露に消ゆる怨となりしなり。

嗚呼、織田氏の武田を滅せしは天下一變の機會なり、この轉換の機を促せしは奥平父子なりき。

奥平氏は代々上野の住人なりき。美作守貞能が四代の祖八郎右衛門貞俊に至り三河國に移り徳川清康（家康の祖父）に仕へ、清康死して後今川家に屬し恩將氏真に及びて、再び徳川家康に従がひたるも、貞能、信昌父子は素より家康に對し二タ心なかりしが、貞能が父監物貞勝入道道久を始として奥平の

一族皆な甲斐の武田に従ひしかば貞能も終に同意せしなりしとかや。故に信玄の死後武田に反きたり武田破れて後、九八郎信昌の妻となりしは家康の長女龜姫後に加納殿と申せしなり、(信昌が濃州加納城にて十万石を領せしが故なり) 龜姫は岡崎三郎信康に同母の姉なりければ、信康の姉を九八郎の妻とはなし難しと拒まれたれど、信長の助言と父家康の言により終に信昌に嫁せられしなりとぞ。又、長篠の戦功を賞して織田信長は九八郎を武者之介と名乗せ、信長の信字を與へて信昌とは名付けしなり。父貞能は慶長三年十二月六十二才にて卒す。信昌は京都守護職となり濃州加納にて十万石を領したり。嫡男大膳大夫宗昌も野州宇都宮にて十万石を領し、二男松平右京大夫宗信は上野國長根の城主となり、三男松平攝津守忠政は上野吉井二万石を領し、四男松平下總守忠明は勢州龜山に於て五万石を領しけり。

信昌は元和六年十一月六十一才に卒せり。生前に子孫皆な万餘の諸侯となるを見て世を逝りしなり。享保二年豊前國下毛郡中津に移り十万石を領し同姓の分家はあざざりしと雖も、武州忍十万石を領したる松平下總守の家祖源忠明は實に九八郎信昌の四男なりき、故に徳川氏の奥平家に對するは優對の禮を執りしなり。定期の参府の節は御使番上使として來り、白鳥毛、黒羅沙の二本道具、爪折傘を持せ家門の光輝めでたかりしなり。

奥平九八郎信昌の如きは、實に戦亂の世にありて幸福の人と云ひつ可し、家康の長女を娶りしが爲に子孫皆な堂々たる大國の君となり、身も亦た六十有餘の高齡を以て世を逝れり、然りと雖も長篠戦勝の當時を顧みれば、愛妻は武田の毒手に死し一族門葉には別れ、籠城の飢餓には死に頻みて辛く生命を得來りし者なり。

戸川殘花先生著

廿七年三月ヨリ向一ケ年間ニ出版完成スベシ

三百諸侯

全部拾二卷 毎月一回發兌

正價 一冊(百廿頁)拾二錢 洋裝大判美本 金六拾七錢 全部十二冊前金 壹圓二拾五錢 郵便稅一冊四錢

花は櫻、人は武士、武士の精英は戦國の世にあり、足利の末葉にあたり風雨飄然として江湖を暗くす叱咤して黒雲を掃ひしは三百諸侯の祖先たり、今や旗下八萬騎の一人戸川殘花先生清艶の健筆を以て、名將勇士の美談を著述せられたり、先生か短篇に妙、史談に巧なるは世の知る所、實に此書は明窓淨几の伴侶教壇講筵の材料、爐邊の教師なり、讀み來れば旭日に匂ふ櫻花の陰に武士の劍を提げて立つあるが如き感ある可し。

第壹卷	越前・伊達・池田・奥平・相馬・真田・大村・北條・松前・佐野・筒井・浦生	第七卷	尾張・佐竹・畑田・安藤・島居・五島・谷・林・間部・六郷・建部(藤田)
第二卷	前田・山内・津輕・中川・小出・片桐・松平・藤坂・植村・柳生(島島・竹中)	第八卷	細川・有馬・酒井・宗・板倉・松浦・朽木・森・森川・久留島・前田(小豆川)
第三卷	水戸・淺野・柳澤・松平・秋月・阿部・岡部・木下・太田原(高橋・生駒・堀尾)	第九卷	保科・井伊・大久保・喜連川・秋田・石川・關・高木・諏訪・渡邊(加藤・里見)
第四卷	島津・鍋島・榊原・水野・堀・米倉・遠藤・安部・伊東・三浦・青木(月川)	第十卷	上杉・松平・稻葉・京極・四尾・内田・土屋・溝口・分部・加納・松倉(最上)
第五卷	肥前・藤原・本多・戸田・内藤・仙石・三宅・加藤・山・一柳・平岡(田中)	第十一卷	南部・立花・土井・井上・土岐・市橋・遠山・太田・大岡・米津・田沼(天野)
第六卷	毛利・藤堂・小笠原・戸澤・稻垣・土方・秋元・青山・相良・山口・新庄(古田)	第十二卷	黒田・岩城・丹羽・織田・牧野・久世・龜井・永井・九鬼・大岡(小堀・平岩)

例言

一 三百諸侯とは大數をあげて書名と爲しゝものなり、白石の藩翰譜には三百三十七家なりと雖も、嘉永以後の武鑑に由れば本末二百五十三家あり、若し同姓末家等を除く時は全くは百二十二家なり。(明治以後は採らず)

一 系譜は藩祖と今日の華族の爵位氏名をめぐ、偶次其間に四五の名を掲ぐるは讀者の辨をはかるに

あるのみ。遠祖は八孫王(藤原鎌足)の如く疑がはしきものありと雖も、まばら武鑑、華族名鑑等に從がふ。發行は諸書によりて異同あり、この書はたゞ其精神のある所に着眼して小話體に潤飾せり。絶家世し宇重なる諸侯を選みて挿入せり、()を以て區別す。

一 發行は藩祖のみに限りしに非ずと雖も、昇平二百年間は、事跡の觀る可きもの少きが故なり、且精確の事を知り難きが爲なり(樂翁公等の如きは例外なりと雖も)。

一 この書全部十二卷なりと雖も、一卷は凡百二十頁餘の小冊子なり、百二十二家に配分つ時は一家十二頁にだにすらず藩祖が偉業の一斑をも窺かふ能はず記實の少きは看官これを恕せよ。

例言

一 實名には同音異字なるもの多し、また其人によりては讀み慣れしものと雖も、其實誤謬れるものあり、(石田三成は三成なるが如し)此篇にはなる可く正確なるものを選び。
一 舊藩地は諸侯によりて、屢次所替を爲せし者あり、故にこの書は嘉永前後の武鑑に従がふ、明治以後の如きは取らず。

明治廿七年四月

著者識

三百諸侯卷二目次

第一 前田……………一 頁

- 從二位大納言利家……………豊大閤を讒訴せし人を送り遣して罪せしめられし事……………利家大閤の遺言を忘れざりし事
- 加賀中納言利長……………再度關東へ参らざりし事
- 前田能登守利政……………利政の大器なりし事
- 小松中納言利常……………殿中にて罌丸を出し疝痛の偽なきを示さるゝ事……………古來の名將を評せし事
- 蕨餅を製せし姥を雇ひし事 革袴たはぬ髪にて登城の事……………ごまづの事

第二 山内……………二二頁

山内土佐守一豊……………一豊の妻密書を笠の紐になせし

事—軍評定の事

第三 (福島)……………三一頁

參議從三位源正則

關ヶ原の戦の事

正則配流の時の事……………正則の家人浮田秀家に酒を贈りし事

第四 (竹中)……………四六頁

竹中半兵衛尉重治

稻葉山を攻めし事

栗原山の閑居の事

竹中采女正重次

平野屋の妻を奪ひし事

第五 片桐……………五五頁

片桐市正貞盛

大阪落城の前後の逃懐の事

第六 津輕……………六二頁

津輕右京大夫藤原爲信

狩場にて民家を焼きし事

海中へ寶刀を投げ入れし事

第七 小出……………七〇頁

小出大隅守三尹

大阪落城の時の事

第八 中川……………七五頁

中川瀨兵衛尉清秀

和田伊賀守惟政を討ち取る事

第九 松平……………八一頁

第 二 山 内……………二二頁

山内土佐守一豊
事—軍評定の事
一豊の妻密書を笠の紐になせし

第 三 (福 島)……………三一頁

参議從三位源正則
關ヶ原の戦の事
正則配流の時の事
正則の家人浮田秀家に酒を贈りし事

第 四 (竹 中)……………四六頁

竹中半兵衛尉重治
栗原山の閑居の事
稲葉山を攻めし事
竹中采女正重次
平野屋の妻を奪ひし事

第 五 片 桐……………五五頁

片桐市正貞盛
大阪落城の前後の述懐の事

第 六 津 輕……………六二頁

津輕右京大夫藤原爲信
海中へ寶刀を投げ入れし事
狩場にて民家を焼きし事

第 七 小 出……………七〇頁

小出大隅守三尹
大阪落城の時の事

第 八 中 川……………七五頁

中川瀨兵衛尉清秀
和田伊賀守惟政を討ち取る事

第 九 松 平……………八一頁

四家形原。深溝。能見。長澤。

松平主殿介伊忠

同 主殿頭家忠

鷹の巢にて父子訣別の事

松平次郎左衛門尉重吉

十五歳にて敵の首を取りし事

松平伊豆守信綱

袋に入れられし事

明暦火災の時の事

いろくの事

第十 脇坂

九八頁

脇坂中務少輔安治

雄利の人質を還せし事

脇坂淡路守安元

「北南」の和歌の事

第十一 植村

一〇五頁

植村新六郎氏明

叛臣安部彌七郎を斬りし事

植村出羽守家政

宇都宮鈞天井の事

第十二 柳生

一一二頁

柳生但馬守宗矩

將軍家の御師範役なりし事

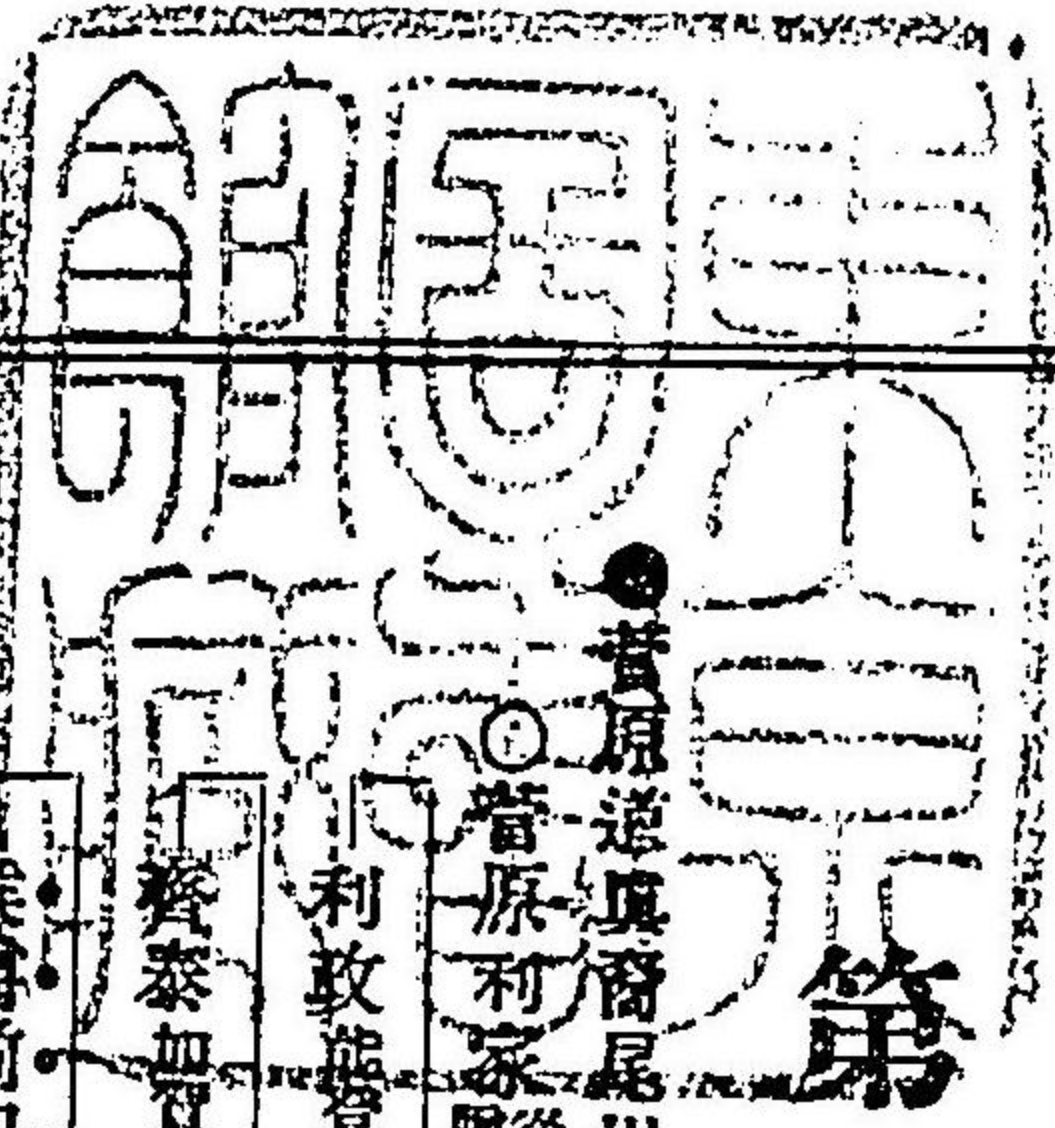
板倉内膳正を追ひ懸けし事

三百諸侯卷二目次 終

三百諸侯卷二

戸川 殘花 著

第一 前田



●菅原道真裔尾州海東郡荒子城主前田藏人男

○菅原利家 從二位大納言 利長 加賀中納言 正三位

利政 能登守 利常 小松中納言 肥前守

齊泰 加賀宰相

●保壽前田利嗣 (金澤藩)

●菅原利常二男

○菅原利次 侍從 淡路守 利興

●伯爵前田利同 (富山藩)

●菅原利常三男

○菅原利治 侍從 飛騨守 利明

●子爵前田利昭 (大聖寺藩)

●菅原利宗四男

○菅原利孝 大和守 利豊

●子爵前田利昭 (七日市藩)

贈從一位前田利宗は童名犬千代丸と稱し、後に改めて孫四郎又は又左衛門と名乗りたり。前田の姓は